AACK 京都大学学士山岳会

No.26・27
(2002年11月号と2003年2月号の合併号)

Newsletter

March 2003

http://www.aack.or.jp

目次

●特集　AACKの行くべき道
・A13　50年近く前にすんだ議論では？　本多　勝一……1
●内外山行紀行文
グリーンランド紀行　北村　泰一……2
アコンカグア東面からの登頂記　睦好　正治……7
ケニア山調査・登頂記　安仁屋　政武……9
康南の秀峰ダンチェツエンラ（五八三三m）初登頂　阪本　公一……13
東ネパール・アルン川流域訪問記　今井　一郎……16
南アルプス縦走　饗庭　邦光……20
●山の文学・随筆、研究（その1）
文化としての登山　川瀬　裕史……23
●訃報……28
●編集後記……28

【特集】AACKの行くべき道

A13　五十年ちかく前にすんだ議論では？

本多　勝一（一九五四入部）

これも山岳部OBの一人である松沢哲郎氏が、最近のNHK教育テレビで日本の霊長類学について『進化の隣人』と題し、二ヶ月間の連続講義をしました。たいへん面白く、かつ勉強になりました。同時に今西錦司という人物の凄さに改めて感嘆させられもしました。

日本の霊長類学を世界の最先端たらしめた理由として、松沢氏は三つの要素（先進国で野生のサルがいるのは日本だけ、ほか二点）を挙げました。しかし、そのさらに奥にある核心部として、今西錦司の「パイオニア・ワークの精神」があることも松沢氏は指摘しています。だれも思いつかないことを考える、だれもやっていないことをやる。

たしかに今西錦司は、自分の人生自体がそれだったでしょうが、登山や昆虫に没頭していた学生時代の自分を、それからあと次々と変革し、対象を変えてゆく。AACKも今西錦司たちが、踏み台として創設しただけの組織の「ひとつ」（少なくとも今西錦司個人にとっては）にすぎないと思います。

なぜこんなことを書いたかというと、この会報が北村泰一氏の編集担当になってから議論をよびかけ、続けられている主題―「AACKのゆく道」は、実はもう五十年ちかくも前に山岳部で散々やりあったテーマだからです。その「成果」として私なりにまとめたのが、京大山岳部の『報告』第五号で当時発表した「パイオニア・ワークとは何か」でした。

したがって、今ごろこんな議論をむしかえしても、私には全く興味が起きてきません。五十年ちかく前に決着がついているのですから。あの部報がいま手元にあるOBは少ないと思われますが、もう少し書き足して拙著『旅立ちの記』（本多著作集第二巻・朝日新聞社・一九九三）に収録されているので、関心のある方は見ていただきたい思いです。　ご希望の方があれば、著者割引の値段（三千円）でお送りします。

（住所　郵便番号157―8691
東京都世田谷区成城郵便局　私書箱39）

内外山行紀行文

グリーンランド紀行

北村　泰一（理　一九五四卒）

●まえがき

えらいものである。学生時代（五十年前）には探検の対象であったグリーンランドが、今は観光の対象である。

これは、私がある旅行会社の第二添乗員として、グリーンランドに赴いた紀行文である。

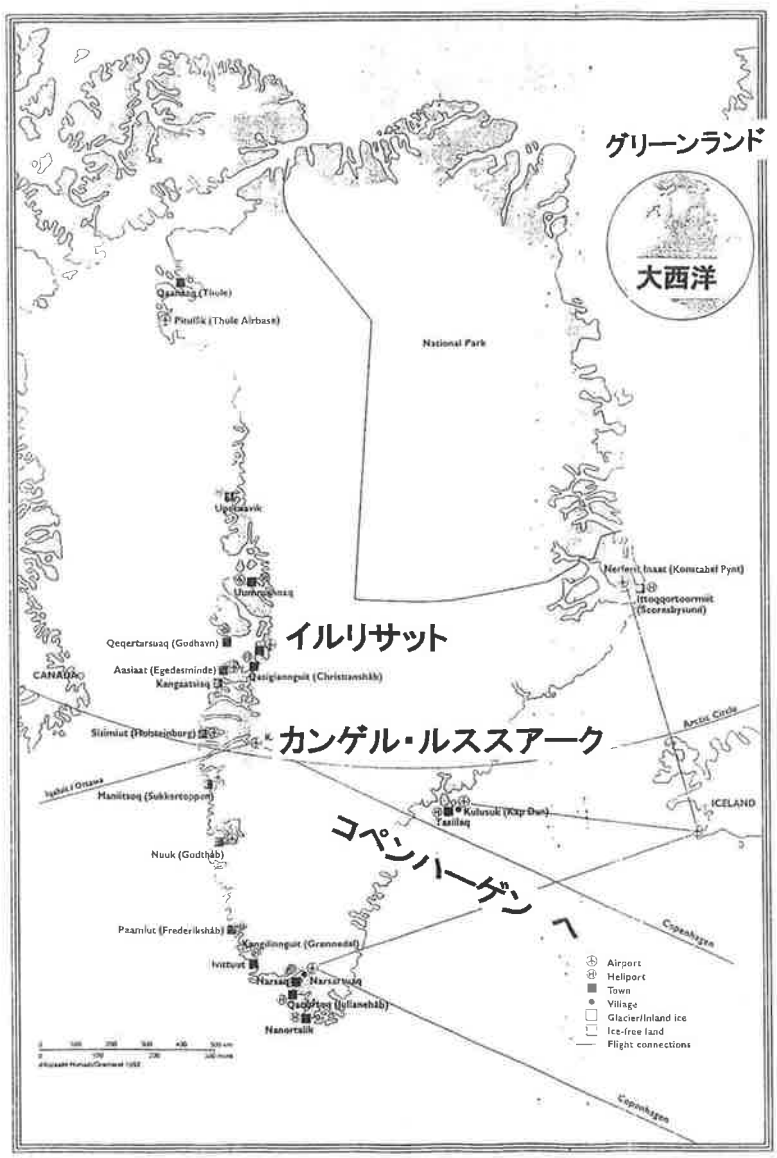
今年（二〇〇二年）の三月、私はグリーンランド（デンマーク領）へ八日間の旅をした。コペンハーゲン（デンマーク首都）から、グリーンランドの西南部の入口、カンゲル・ルススワーク（Søndere Strøm fjyord）という地点で小さい航空機にのり換えて、そこから数百キロ北のイルリサット（Illurisat）というイヌイットの漁村に飛んだ。

〝イヌイット〟と〝エスキモー〟とは違う。北極へ行って、間違っても、『あなたはエスキモーか』などと問うてはいけない。それは、昔、日本人のことを『ジャップ（蔑称）』と呼んでいたことと同じようなものであるからである。エスキモーとは、昔ながらのイグルーに住み、アザラシやトナカイの生肉を食べて暮らしている人たちと定義されている。一九〇三～一九〇六に北西航路（大西洋からカナダの北極を通過してベーリング海峡に到る北極航路）を初通過したアムンゼンの本にはエスキモーという言葉が使ってある。時期（一九〇三頃）といい、写真からみる彼らの様子といい、これはこれで正しい。

何時ごろからイヌイットという言葉が使われ出したかは正確には知らない。

北極地方の比較的南に住むエスキモー（定住的生活をする）は別だが、高緯度のエスキモー（遊牧民的生活をする）は大集団になることはない（十六世紀のグリーンランドや北極カナダの探検時代に、探検家がエスキモーに襲われたり、誘拐されたりした事件があるから、村くらいの集団は形成していたらしい）。だから、〇〇族というような集団にはならず、まして国家というような集団を形成しない。北極地方のアチコチに一家族か、せいぜい数家族くらいが一緒に生活しているだけである。国籍はカナダであったり、アメリカ（アラスカ）であったりする。この話は、主として北アメリカ（カナダ）の北極地方に限定する。

ところで、一九五七～五八年頃、カナダ北



極地方に大飢饉（異常気象）が起こった。カナダの北極圏では、まずコケ類が全滅に近くなり、それを食糧としていたトナカイ類が春になっても北極へ移動しなくなった。そして、それをアテにしていた各地のエスキモーが全滅に瀕したという連鎖反応がおこった。このことから、カナダ政府はそうしたエスキモーをよび集め、北極圏の比較的低緯度に人造の町をつくってそこに定住させた。生活費は、南の地方に住むカナダ国民の税金によって補助が行われているという。

私は、一九八〇年の一月～二月の厳寒期に、カナダのハドソン湾沿岸のそうしたエスキモー部落のひとつ、ランキンインレット（北緯六三度くらい）というところで生活したことがある（オーロラの研究）。そこは寒かった。南極より寒かった。スキーで使用するキルティングなどは、冷たい風がスースー通り、スカスカの紙を纏っているように感じられた。私が、ありたけの衣類を着ていたら、イヌイットの助役が、彼らが着るあの毛皮のパルカを貸してくれた。お陰で寒さは防げ、町（村だが）の中を歩けるようになった。パルカを着、メガネをはずすと、我々はもうイヌイットと区別がつかない。何度か、村の人からイヌイット語で話しかけられた。

かれらは木造の家にすみ、重油ストーブで暖をとり、ソニーのステレオを楽しみ、カワサキのスキドゥー（二輪車バイクの前輪がソリで、後輪が幅広いキャタピラー様のもの）で雪上を走りまわっていた。滞在中、私はイグルー製作の講習会に出席したが、生徒はイヌイットの青年で、先生は白人であった。

イヌイットとは、そうした人たちの呼称で、エスキモーとは、いわば文明開化していない昔ながらの人達（もうカナダの北極圏にはほとんどいないという）をいう。だから、文明開化した人たちは、『エスキモー』と呼ばれることを嫌がる。

私の学生時代（一九五十年代）には、エスキモーというのが普通だったし、本多勝一氏の本には『カナダエスキモー』という標題がついている。初版は昭和三八年（一九六三）だし、実際、本多氏が接していた人たちは、『エスキモー』のようである。

このカンゲル・ルススワークは、立派な大きな空港であるが、人口は数百人（空港に働く人だけ）のみであった。空港を少しでも離れると、もはやそこは氷と雪の大地が果てしなく広がっているだけであった。

グリーンランドの玄関入り口にも拘わらず、空港内の一端に管制塔を兼ねたホテルがあるだけのところである。グリーンランドの他の地域にゆく人々が、乗り継ぎの時間をこのホテルで過ごしている。もと、アメリカのＤＥＷ（早期国防警戒ライン…ソ連の核ミサイルを警戒する北極にむけてはられたレーダーシステムの網）の一つであったとのことである。近くに、白い平らな幅広い河状のものがあって、白く凍てついていた。フィヨルドであった。

タラップをおりると、気温はマイナス二一℃。息を吸うと鼻毛が凍るのがわかった。こんな感じは、四五年ぶり（南極）、二十年ぶり（ランキンインレット＝北極）である。ブルブルッと、思わず武者ぶるいが出た。

この旅行は、朝日旅行福岡という旅行会社により企画された。私は非常勤の第二添乗員となった。客の中には、ドイツ在住の西堀峯夫氏（西堀栄三郎氏の三男）の家族三人（夫人と娘さん、それに、たまたまドイツに滞在していた奥さんの実母）も含まれていた。三人は、デンマークのコペンハーゲンで我々に合流した。

私と旅行会社との結びつきも不思議なものだった。

数年前に、大阪の朝日新聞が南極のことを取材しにきた。私が、今、生き残っている数すくない日本最初の南極越冬隊員であることと、犬係りであったからであろう。九大名誉教授という現在のタイトルと当時の犬係りという職務が結びつかないことも彼らの興味をひいた一因かもしれない。更に、無人酷寒暗闇の一年を生きつづけたタロ・ジロの再会者・発見者・同定者であり、誰よりもタロ・ジロに近い人間であることも興味を加えたのかも知れない。今考えると、私の南極は、不思議な運命に操られていた。

その朝日新聞の記事をみて、〝フォーカス〟という写真雑誌がまた取材にきた。それを見た（と思われる）日本テレビという民間ＴＶ会社が『知っているつもり』という番組にとりあげた。ＮＨＫが『プロジェクトＸ』

という番組に最初の南極探検（現在は実質的に観測）をとりあげ、西堀栄三郎さんをクローズアップしようと考えたとき、その助演者には、私が一番よいと考えたことであろうことは想像に難くない。それまでに、いろいろの新聞やフォーカスの記事やTVの映像があったからだ。しかし、NHKはすでに公開された記事や映像と同種の内容であることを嫌い、今までに報道された話題（犬たち、タロ・ジロ）を避けて、独自の番組を作り上げた。さすがにNHKである。お蔭で、私は従来の『犬の北村氏』から『オーロラの権威の北村氏』という肩書きを貰い、変身した。

このことから、オーロラに関する講演の依頼が多くなった。自分の本当の研究は、オーロラを、極地ではなく赤道地方から、地磁気変化をとおして研究することであった（本当は、赤道途上国の人跡まれな場所に行ってみたかったからかも知れない）。私は、長年研究してきたオーロラの話を学会以外の場で語ったことはない。だが、私の知らない間に、オーロラは観光の対象になっていた

こんなのを、『芸は身を助ける…』というのかも知れない。

東京のスカンジナビア政府観光局から、また、民間のスカンジナビア航空会社から講演の依頼が来た。北欧のオーロラ観光の宣伝講演会を開くという。

聴衆の中に、旅行会社の人がいたに違いない。ある時、グリーンランドへ添乗することを依頼された。添乗の仕事は、いわば接客業である。学生としか接したことのない、わがままな自分が、接客などという仕事が出来るだろうか、と不安に思ったが、〝極地の蒼氷よ、もう一度〟という思いが先にたった。

●グリーンランドへ

二〇〇二年の三月一七日に福岡を出発した我々一三人は、成田経由でコペンハーゲンへとんだ。そこで、デンマークの女子大学生のアンデルセン嬢（二十）がグリーンランドでの細かい世話をするために合流した。彼女はグリーンランドを何度も訪れたという。

翌三月一八日、コペンハーゲンからグリーンランドのカンゲルス・ルススワークへわたった。コペンハーゲンではそれほど寒くはなく、長袖の毛のシャツ一枚で町を歩いても平気だった。それが、グリーンランドのカンゲル・ルススワークに近づくと、機窓から見下ろす海は白く凍りついていて、山々は氷で覆われていた。

カンゲル・ルススワーク（約北緯六六・七度）は、コペンハーゲン（約北緯五五・七度（カラフトより少し北））より千km（東京―福岡間）ほど北に位置する。たった千kmほどの差なのに、どうしてこれ程気温が違うのだろうか。

今年の六月（二〇〇二年）にノールウエイの最北端へ行ってきた。北緯七一度あまり（昭和基地とほぼ同緯度）だった。しかし、海岸から千mも聳え立つ峰々には雪こそ残っていたが、海面には小さい一片の氷塊すら浮かんでいなかった。フィヨルドの海面は青々として深く、そして静かで、周囲にそそり立つ山々の峰を映し出していた。どうしてグリーンランドの西岸とこんなに違うのだろうか。

それは、ヨーロッパの岸々は南の赤道から北流する暖流によって温暖であるのに、グリーンランドは北極を流れる寒流が南下するからだと言われている。海水と大気とは、これほど互いに影響しあうのだ。

ヨーロッパ沿岸を暖流が洗っていることは昔から知られていたが、グリーンランドに北極から南下する寒流があることは、一八〇〇年の半ばにふとしたことから発見された。

この寒流の南下の発見には面白い話が残されている。

昔から、シベリアにしか生えてない『はいまつ』が、流木としてグリーンランドの西海岸に流れ着いていることが知られていた。また、アラスカのエスキモーが投げた投げ槍がグリーンランドに漂着したこともある。

このことは、長い間謎とされたまま放置されてきたが、『ある事件』が、人々のその関心を呼び起こした。

その頃、多くの探検家が北極点征服を目指したが、探検船はみな北極海の氷におしつぶされたりして北極到達は成功しなかった。北極到達は諦めねばならないかも知れない。人々が悲観的になりはじめた時、ペターマンという、当時のドイツの著名な地理学者が、ベーリング海峡から北極へ向けて、水路が開

いているとの理論を打ち出した。

それを立証して北極点に到達しようとしたのが、デ・ロング（George Washington De Long: 1844-1881）という探検家である。

探検船のジャネット号は、ペターマンの予言にも拘わらず、ベーリング海峡を少し北へ行ったところの北極海であえなく氷のために沈没（一八八一）。デ・ロング隊長もシベリアまでたどりついたものの、シベリアの北岸で寒さのために死亡、という事件があった。

問題は、ベーリング海峡で沈んだ筈のジャネット号の一部が、しかも名前入りの舷側の木材が、沈没から二～三年経って、グリーンランドの南の西側の海岸で発見されたことである。ベーリング海峡やシベリア北岸とグリーンランドがどう結びついているのか。

多くの人々は、このことを不審に思った。人々は、シベリアの『はい松』や、アラスカのベーリング海峡近くでの投げ槍がおなじように流れ着いていることを思い出した。そして、今、ベーリング海峡近くで沈んだはずのジャネット号の名前いりの舷側の板がグリーンランドに流れ着いたのである。

こんな時、ノールウエイのある学者が、『これは、ベーリング海峡から、北極を通って海流がグリーンランドの沖を流れているに違いない…』と発表した。

『そうか、そうだったのか…』と心に衝撃を受けた探検家がいた。ノールウエイのナンセン（Fritjof Nansen: 1851-1930）である。

ナンセンは、『それなら…』と、氷の圧力がかかっても船はその力で持ち上げられるように、船底をおわんのように丸くし（フラム号）、ベーリング海峡から北極点を流れる氷と海流にのって北極点を漂流探検しようと考えた。いわゆる、逆転の発想である。

これが、世に名高いナンセンの『北極漂流探検（一八九三～一八九六）』である（加納一郎著、『25人の探検家』、一九九二年朝日文庫）。

私はグリーンランドの西海岸で南に位置するカンゲル・ルススワークが周辺の海や大地がすっかり凍りつき、いてついているのを機上から見て、ナンセンの探検を思いだし、なるほど、北極の寒流がグリーンランドを南下しているのだな、と実感した。

グリーンランドが寒いことを、もっと切実に体験したが、それは後のことである。

コペンハーゲンを発つ。コペンハーゲンとの時差は四時間あり、ちょうど日本と一二時間の差となった。日本とは昼と夜とが反対となった。

機は、カンゲル・ルススワークの近くに来たらしい。眼下の海は凍り、陸は雪で覆われていた。

無事にカンゲル・ルススワークに着く。ランキンと変わらない。乾いた雪である。さすがに寒い（マイナス二一℃）。快晴で寒さだけがキュンと肌を引き締める。

一休みののち、車で防寒着を借りに行く。車と言っても、トラックの荷台に木の箱を載せ、その内部に座る椅子を設け、バス様にした異様なものであった。五分ほどで着く。上下つなぎの防寒服、手袋、靴などを借りた。私は、持参した自分の防寒着でやってみることにした。

カンゲル・ルススワークを発ち、数百㎞ほど北のイルリサットに向かう。下界はますます雪と氷で覆われだした。

イルリサットにつく。カンゲル・ルススワークでは、気温は低いが、抜けるような天気であったのに、ここイルリサットではガスがたちこめ、粉雪さえ舞う陰鬱な冬の天気であった。

海は凍り、あたりは陰鬱で、予定していた犬そりは時間が遅くなったのでその日は無理、となった。フィヨルドのクルーズも、海が凍っているので中止。犬そりは明日午前に延ばされた。

夜はマックス・オックス（ジャッコウ牛）を味わう。昨日、薄みの肉を食べたがあまりおいしい印象はなかったが、その日はタレがおいしそうだった。三切れあったが、みな平らげた。イヌイットだけがマックス・オックスの猟ができ、肉を食べることが許されているのに、我々が食べることが出来るなんて、どういうことだろう？我々はイヌイットと間違われているのだろうか。

●犬ぞり

翌日、三月十九日は、朝九時四五分ホテルを出る。さあ、犬そりだ。ホテルのミニバスでイルリサットの町のはずれまで走る。

小高い丘の上。そこはイヌイットの村らしい。三～四階のアパートがあって、そこが彼らの住居らしい。アパートは国営であるが、家賃は月十万円もするという。

北欧、グリーンランドは物価が高い。それだけ、高収入なのだろうか。エハガキが一枚百円以上（普通、三十円～六十円）。ビン入りコカコーラが一本五百円もする。

犬そりを提供してくれたイヌイットの青年は通常は漁業に携わっているという。今は、海がこおり、漁業は出来ないという。

つまり、われわれ一人に村の青年一人がのる。はじめ、私たち五～六人づつ、一台のソリに乗るのかと思っていたら、一台のソリにイヌイットの青年と、客一人であった。そりは木製で、一台を一二頭から一五頭の犬が曳く。普通、人間二人の荷重なら、犬四～五頭でよい。

犬たちは、獰猛な様子であったが私には懐かしかった。ゴローやクマ（南極時代の犬）のように思えた。御者の若者に、犬をなでたいといったら優しい犬を選んでくれた。その犬は、目を細めて私の愛撫を楽しんでいたようだった。

そりに乗るや否や猛然と走り出す。時々、御者の若者は、ピーピーと聞こえる口笛を吹いて号令を出していた。

トウトウ（南極時代に出していた命令。まっすぐすすめ！の意味）と叫びたかったが声がでなかった（七年まえに五千ｍの高原で人事不省となり言葉が出なくなったが、現在は小声ならやっと出るようになった）。

風は向かい風で冷たかった。御者の若者に隠れるようにして風をさける。冷たい。顔が凍りはじめるのを感じる。これはかなわない。マイナス四〇℃はあろうか。

そりは飛ぶように走る。少々の岩でも、その上を犬は走る。その度にソリはモンドリうつように飛びあがる。振り落とされないように必死でソリにしがみつく。そりにはロープがまいてあって、それに掴まれという。

ゆるい登り坂であるが、二人をのせて犬ソリはスピードを落とすことなく走った

まもなく、広いくだり坂にさしかかった。青年がロープをしっかりもて、と促す。くだり坂は、更にスピードがまし、ソリは跳ね、相当な速さで走る。岩の上でもお構いなし。ソリが傾くので、ロープをもち、バランスをとらなければソリからほうり出される。

当初、二時間の犬ソリは〝センチメンタルジャニー〟だと思っていた。だが、実際はそれどころではない。写真も写せない。振り落とされまいと、必死にソリのロープにしがみついているのがやっとだった。

下り坂になると青年はソリから飛び降り、後ろについた。おそらくブレーキをかけているのであろう。

とにかく寒い。必死でこらえている頃、どうやら先頭が終点についた様子。

小高い丘が終点であった。やれやれ。岩陰に風を避けたが、あたりは陰鬱で微風が吹いていて寒い。ア！　思い出した。はじめての犬そりでユートレへの一泊の旅も（南極）こんな陰鬱な感じだった。

雪がちらついている。もう一人の添乗員がテルモスからの温かいコーヒーを飲ましてくれる。アアおいしい。

ある客が、半泣きになって冷たいと言い出す。ある人は、高いお金を出して、なぜこんなところへきたのだろうとボヤく。凍傷になられたら大変だ。彼らはお客様なのだ…。

もうデジカメは動かない。アルカリ電池がダメになった。リチウム電池なら働くという。

やがて帰途につく。小さいのぼり坂で飛び降り、ソリを押す。犬たちが可愛そうである。南極ではいつもそうしていた。　だが、イヌイットの青年は、ソリの前の方で乗ったままであったので、自分がソリを押し、イヌイットの青年が乗ったままという状態になった。南極時代のソリには、後ろにもソリの部分が出ていた、押しながら飛び乗ることができたが、今回は、ソリの後部には乗るところが出っぱっていない。ソリの本体に飛び乗るには、ソリより早く駆けてて飛び乗るしかない。体は着ぶくれていて自由が利かない。その内に御者のイヌイットの青年が気がつき、ソリを止めてくれた。やっと飛び乗り再出発。

最後に長いおおきなくだり斜面があった。雪面であったのでそれほど危険だとは思わ

かなかったが、何しろ斜面は長かった。寒かった。

やっと坂下の水平になった広い台地におりる。

上を仰ぐと次々と降りてくる。転覆しないかと思ったが、みな無事に降りてきた。

これをビデオにおさめた（電源はリチウム電池であった）、これからの道すじに危険はない。淡々と村に帰る。

ヤレヤレという実感であった。

犬たちよ、今日はご馳走を食べてくれ。

イルリサットのラスムッセン（Rasmussen）の生家が博物館になっていた。数々のラスムッセンの持ち物が陳列してあった。

ラスムッセン（Knud Johan Victor Rasmussen, 1879-1933）とは、デンマーク人で、ここイルリサットに生まれた探検家である。世界的には余り有名でないが、グリーンランドの北部を探検し、グリーンランド探検史の一ページを飾った探検家である。父親は宣教師をしていたという。風貌をみると、イヌイットの血が入っているようにも見えた。グリーンランドの北部の探検に名を残した人で、特に、グリーンランド北部のエスキモーを世に紹介したことで有名である。グリーンランド北部に〝チューレ〟という（現在は町）があるが、これはラスムッセンが設立し、彼が名づけたものである。

その夜、すごく立派なオーロラが見えた。あとで、客の一人のセミプロ写真家から、そのオーロラの写真をもらった。それは、下辺があかく、南極でも見たことが無いほどの立派なオーロラであった。私の最後の見納めオーロラとしては申し分ないほど立派なものであった。

帰途のコペンハーゲンで、寒さのために半泣きになった客も、金を出してこんな辛い寒いところへ何故きたのだろうとボヤイた客も、『オーロラも見たし、今回の旅は一生忘れ得ないでしょう』と言ってくれた。

コペンハーゲンから成田への便は、日本人の若者であふれ返っていた。席をかわるとまた声をかけられた。アレ？どこかで会ったのかなあ？　その人は、私の東京講演を聴いてオーロラを見たくなり、東京の会社のツアーに参加し、北欧へ行ってきたという。そこで見たというオーロラを、あとで写真を送ってくれたが、グリーンランドのオーロラの方が格段に立派であった。あんな立派なオーロラは、あと、十一年たたないと見られないだろう。

アコンカグア東面からの登頂記

睦好　正治（農林　一九九一卒）

この年末年始にかけて、アルゼンチンにあるアジア大陸以外の最高峰、アコンカグア（六九五九メートル）に登ってきたので報告する。

小生が同峰行きを決めたのは、昨年十月中旬ごろ、横断山脈研究会で知り合った石川龍彦氏らの計画に合流させていただいた。

簡単にメンバーを紹介する。隊長の石川氏は四十九歳、旧ソ連を含むヒマラヤの高峰に七座登頂し、アコンカグアも既に二回登頂している。京大山岳部に三ヵ月ほど在籍し後に探検部に移ったとのこと。他は、志村真由美嬢と鈴木一己氏だ。志村は二十九歳、昨年ニンチンカンサ峰（中国・チベット）を六五〇〇メートル付近まで登っている。鈴木は二十二歳で、ハンテングリ（カザフスタン・七〇一〇メートル）やランシサリ南西峰（ネパール・六一四五メートル）の登頂経験がある。いずれも、アコンカグアに登るには十分すぎるほど高所経験がある。

今回は、北面からのノーマルルートではなく、東面にあるポーリッシュグレイシャからの登頂を目指すことにした。このルートは、一九三四年三月にポーランド隊が初登している。五九〇〇メートルの最終キャンプから頂上まで標高差千メートルをピッケルとアイゼ

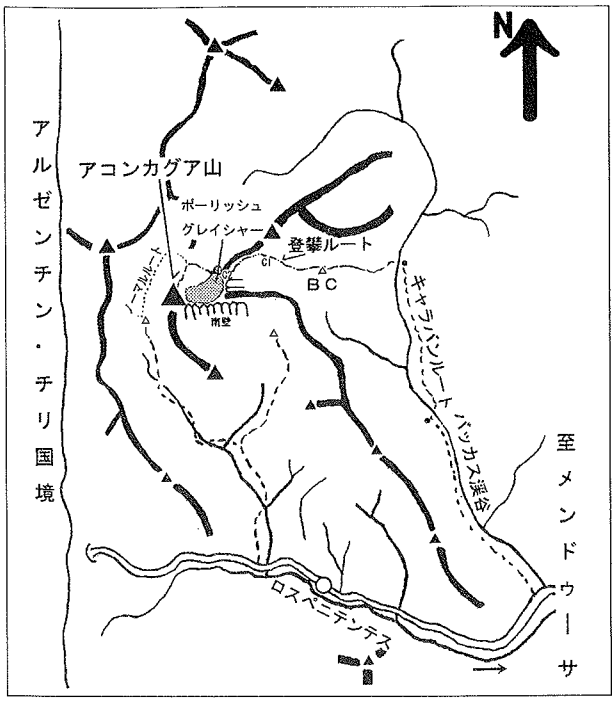
第1図　アコンカグア位置図

ンを使って登高することができ、ノーマルルートに次いで人気のあるルートだ。

十二月十五日に日本を発ちサンチアゴ経由で、十七日に州都メンドゥーサへ入る。そこで登山許可の取得と食料品や燃料の買い出しを行い、麓の街ロスペニテンテスから約四十キロメートル、三日間のキャラバンの末、二十一日に東面のベースキャンプとなるプラザアルゼンチーナ（標高四二〇〇メートル）に入った。

徒歩でベースキャンプ入りしたおかげだろうか、四千メートルという高所にもかかわらず頭痛を感じることなく高山病の症状は軽微だ。また、このあたりは気圧が高いのか、高度計が二〇〇から三〇〇メートルほど実際の高度よりも低い値を示す。高低差はともかく、気圧の面では若干ながら身体に優しい地域だ。ベースキャンプにはレンジャーと医師が常駐し、登山者の指導管理と万一の事故に備えている。

計画は、頂上との間に二つのキャンプを設け、三十一日の大晦日に最終キャンプのC2に入り、元旦に頂上アタックという按配だ。荷上は全て自分たちで行うが、「二行一休」つまり二日動いて一日休む、できるだけベースキャンプで睡眠をとる、というように、たかだか標高差一七〇〇メートル、しかも登山道がある状況にしてはゆとりのあるプランだ。おかげで小生の場合、毎日毎朝起床時の脈拍は六〇と平常時と変らず、高所の影響による身体への負荷はかなり小さかった。



第2図　アコンカグア周辺詳細図

一月一日の午前二時、予定通りC2（標高五九〇〇メートル）を出発する。月明かりのもとポーリッシュグレイシャに取り付く。次第に傾斜がきつくなり氷が堅くなってくる。三十五から四十五度程度だ。過去の記録やガイドブックによると、氷河の表面上に凹凸があり登りやすそうだったのだが、今回は、テカテカのツルッとした面で想像した以上に悪い。バイルを打ちつけると先端が一センチ刺さるくらいで、確実に喰いこんだ感触が無い。ロープを使って登るほどの時間的余裕はなく、我々の実力ではロープ無しで安全を確保することは困難と判断し、二時間ほど行動したところで撤退とする。午前六時にテント帰着。行動できないほど風が強くなる。仮に前進していたとしたら無事では済まなかっただろう。強風は二日間つづき、元旦二日と連続して停滞した。

一月三日、ポーリッシュグレイシャは諦め、北東面をトラバースしノーマルルートに合流して頂上を目指すことにする。東面からの登山者の多くは、このルートを使って頂上を目指しており踏み跡がしっかりついている。六時出発。北東方向には、メルセダリオ（六七〇〇メートル）が朝日に輝いている。ノーマルルートとは、インデペンデンシアハット（六四〇〇メートルにある、壊れた避難小屋）の手前で合流する。風が強く気温が低いためか手に痛みを感じる。日本の冬山よりも暖かいものを用意したつもりだが、これはやばい。羽毛入りのオーバミトンを準備すれば良かったと後悔する。北面のグランカナレータと呼ばれるガレたルンゼに入るとやや風がおさまる。息を切らせないように、ゆっくりペースで歩く。それまで先頭を歩いていた鈴木が頂上手前で立ち止まる。「睦好さん、頂上踏んだことないでしょ？」高所登山において登頂経験のない小生を気遣ってくれたようだ。十四時十九分に頂上。ガスにより視界が効

かず眼下の展望も望めない。写真で見慣れた十字架や登頂記念品を収める金属製の箱がある。頂上であることは間違いない。視界が効くまで待ってみたが、晴れる気配は無く十五時三〇分下山開始。

下山途中困ったことが発生した。頂上をアタックしている最中に降雪があったのか、ノーマルルートを離れ、東面ルートへトラバースするルートのトレースが跡形もなく消え去っていた。しかも視界は一〇〇メートルほどでかなり悪い。雪面の境目が判別できないほど真っ白だ。小生はGPSをもっており、それにはC2の位置が記録してある。現在地からのC2までの方向と距離が判るのだ。試しに使ってみる。ノーマルルートの分岐点からの直線距離は約一五〇〇メートル。GPSの示す矢印に従いラッセルしながら進む、十八時C2帰着。文明の利器の威力を感じる。再び降雪がはじまり、次第に風が強くなる。

一月五日、下山したいところだが、風雪強く全く身動きができない。男三人と女一人とテントは別々だが、男性陣は二・三人用のドームテントのうえ、積雪と風で居住空間が狭くなり満足に足が伸ばせず窮屈で仕方がない。

一月六日、一気にBCまで下山。しばらくBCで休養をとったのち、二日間のキャランバンで麓のロスペニテンテスまで戻り、十日にはチリのサンチアゴに着いた。

結局、登頂は果たせたものの、計画したポーリッシュグレイシャを辿ることができなかった。ある方から、今年の二月上旬に登ることができたと聞いた。参考にした過去の記録も一月下旬であることから、我々は季節的に一ヶ月早かったのかもしれない。

アコンカグアは、登山道はあるものの空気の薄さと風と寒さは七千メートル近い高峰であるだけに厳しいものがあった。地元の受け入れ態勢も整備されており、衛生面の心配もさほどすることは無く、気楽に高所体験ができるところだった。アコンカグアの周囲には他にも良さそうな山はいくつかある。今度はそれらも含めてポーリッシュグレイシャを再度訪ねてみたい。

#ホームページ
http://www.aconcagua.6ch.bz/ に登山記録を掲載しています。

ケニア山調査・登頂記

安仁屋 政武（文地理　一九六七卒）

一九九八年八月、文部省の科研で人類学者にくっついて、北ケニアのレンディーレ族の部落に三週間住み込むことになった。この時思ったのがケニア山に登ることであったが、スケジュールの関係で麓を通過しただけであった。

二年後の二〇〇〇年、チャンスが訪れた。早速、ガイドその他の手配をテレビ番組制作会社アイオスのアフリカ事務所にお願いした。

この会社はTBSの世界遺産という番組の「国立公園ケニア山」を作成している。この時のガイド、スティーブが非常に陽気で人柄がよさそうなので手配をお願いしたわけである。ついでに、日程も適当にやってもらった。

スティーブは一九九六年にエヴェレストで遭難死したガイドのスコット・フィシャーに訓練を受けたガイドで、彼自身ケニヤの一九八四年のエヴェレスト登山隊の一員としてサウス・コルまで登っている。その他ヨーロッパ・アルプスも登っており、ケニヤ山の最高峰バティアン（五一九九m）に案内できる資格を持つ三～四人のアフリカ人のガイドの一人である。

ケニア山はキリマンジャロと違って非常に古い山なので（三五〇万年と言われている）、見事な氷河地形が東西南北に発達している。おまけに赤道直下（三十km南）で氷河が現存することで有名である。しかも、この氷河がものすごいスピードで後退しているという。私の調査の大義名分は十分にあるし、実際に登山というよりは調査が主体であった。

例によって『Trekking in East Africa』を読み、さらにインターネットでケニヤ山を見たところ、登るルートとしては、東側からのショゴーリア　ルートが、その景色の

素晴らしさから一番面白いことが分かった。

しかし、このルートのアプローチは雨期になると車が通れなくなり、三十km近くの林道を歩かなければならなくなる。雑談や議論をする相手がいればこれも悪くはないが、単独ではこの距離を歩く気になれない。従って、最もポピュラーな西側からのルート、ナロ・モル　ルートをとった。

今回はナロ・モル　ロッジを通じてアレンジしたパックで、初日と最終日のロッジでの宿泊を含め、二〇〇〇年十一月五日ー十四日の八泊九日で一〇八七USドルであった。ガイドとポーター三人がついた。個人で調達すれば、もっと安くつく。通常の登山客は三泊四日の予定で登る。健脚で高度順化ができていれば、二泊三日で登るのも可能である。実際、このような予定で登山した三人の日本人のグループと登る時すれ違った。

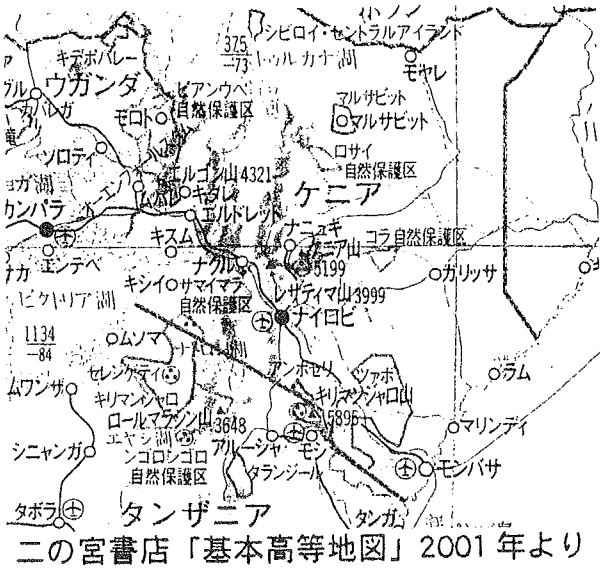
初日は一九八〇mのロッジから車で、雨が降っていなければ三〇五〇mのメット・ステーションまで行く。約二時間である。ここではスイスのグループが気象観測を行っている。名前の由来はこれにある。雨の時は、公園の入り口までで、約八km林道を歩いてメット・ステーションまで行く。ここから三四〇〇〜三五〇〇mぐらいまで散歩にでかけて高度順応の訓練をする。

二日目は尾根沿いに登り四一五〇mにあるテレキ・ロッジ（通称マッキンダー・キャンプ）に行く。途中、vertical bogと呼ばれる所は雨が降ると足下が大変である。景色も変わり映えしない単調な登りであるが、下は竹林、そして広葉樹林、ジャイアント・ヘザー、最上部はグランドセル（セネシオ）という植生の変化が見事である。上部に行くと左手にテレキ谷のU字谷が見えるようになり、天気が良ければケニヤ山がその奥に聳える。この日は、オランダ人三人（男二人、女一、五十〜六十才代）と、抜きつ抜かれつゆっくりと登った。マッキンダー・キャンプはテレキ谷の中のモレインの上にある。商売柄、ついいつの時代のものだろうと考える。最終氷期だろうか、それとも完新世のものだろうか。

ロッジは二四人分のバンク・ベッドがある部屋が三つある。管理人が常駐しており、きれいなトイレが完備し、シャワーを浴びる囲いもある。水はパイプで引いてあるので不自由はしない。この日は他に客がいないので、私が一部屋、オランダ人のグループが一部屋、ガイドのスティーブが一部屋占領した。

ついてしばらくしたら軽い頭痛が襲ってきたので、我慢しないで頭痛薬を飲んだ。ケニア山での炊事は全て灯油のラジウスで、薪のキリマンジャロと大きな違いである。キリマンジャロではポーターに食事を出された時はなにか戸惑いを感じたが、今回は当然のような感じであった。自分自身の変化に驚く。

通常の登山者は次の日（三日目）朝、三時に小屋を出て、六時〜七時頃にレナナ峰（四九八五m）に登頂してその日のうちにメット・ステーションまで下る。レナナ峰は歩いて登れる最高峰である。私は氷河を見ることが大きな目的なので、スティーブと相談して三日目は高度順化の目的で、隣の谷にあるモレイン堰止湖へハイキングにいった。誰もいない静かな所である。ポーターに昼寝をさせている間に、湖底堆積物を

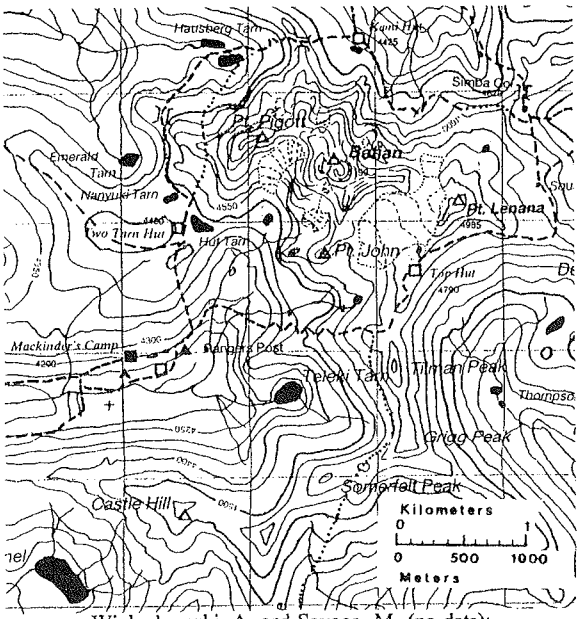


二の宮書店「基本高等地図」2001年より

第１図　ケニア山の位置図

採取して分析したら過去の環境変化が分かり面白い研究になるだろうなァ、などと考えながら湖の周りを廻り、構造土の有無を見た。堰き止めているモレインは小氷期のものだろうか。

ここのカールの地形は、溶岩層の影響で階段状になっているのが特徴的である。テレキ谷との尾根からはケニヤ山最大のルイス氷河、ティンダール氷河、ダーウィン氷河、ダイアモンド氷河などが目の前に見えた。ケニヤ山の周り、標高四〇〇〇～四五〇〇ｍぐらいのところにターン（tarn）と呼ばれる小さな湖が分布している。これは地形学用語で、カール底にできた池・湖を指し、もともとはスコットランド語である。



Wielochowski, A. and Savage, M. (no date): Map and Guide of Mt. Kenya.

第２図　ケニア山付近詳細図

十九世紀にここを探検・調査したのがスコットランド人なので、この名がついたのだろう。谷のＵ字型が見事なのに対し、谷頭のカールは形が整っていないのが特徴的である。硬い溶岩層による段があり、いびつな印象を受ける。

四日目は山の北側にあるカミ小屋に半日かけて行った。いくつものターンを見て、ジョゼフ氷河、セサール氷河の末端の写真をとり、モレインを確認しながら行った。途中、イスラエルから岩登りに来た、若者三人組にあっただけである。カミ小屋は予想（無人）に反して、単独のドイツ人がガイドとポーター一人を連れていた。十二人泊れる小屋で、ベッドにマットレスがある。標高四四五〇ｍなので時々ボーとしたが、大丈夫であった。ドイツ人は頭をかかえて、青息吐息であった。カミ・ターンはノーゼイ氷河の小氷期よりも古いモレインで形成されている。ここから氷河自体は見えないが、グレゴリー氷河とクナプフ氷河のモレインが遠望できる。翌日四時に出て暗いうちに通過するので、写真を撮り観察した。

六日目、夜中に小用に起きたら、霧雨が降っていた。入山して初めての雨である。ドイツ人は今日中にショゴーリア・ルートを下るので、三時に出ていった。私はお茶とビスケットで四時にスティーブと二人で出た。ポーター達はもと来た道を引き返す。外へ出るとやはり雨である。今まで雨期にもかかわらず、晴れていたのに、登頂の日に限って雨とは！真っ暗やみの中を歩きだす。道は岩塊のなかを行くので、リヒトをつけていても私には全く分からない。ガイドはほとんど見えないリヒトで確実に行く。たいしたものだ、と感心する。高度が上がるにつれ寒くなり、四七〇〇？ｍぐらいから雪になり、道は雨が凍ってつるつるになっている。十月上・中旬の穂高の稜線で雪のあと凍ったような感じである。ガイドは手袋を忘れたと言って、手をポケットに突っ込んだまま歩く。私はフリースの手袋を、ポーターがもって帰る荷に入れてしまったので、軍手でストックを左右変わるがわる持ち、片手をポケットに入れて歩いた。滑ったら二十一百ｍぐらい落ちそうなところはいくらでもある。乾いていたら何ともないが、凍っているので少し緊張する。レナナ峰の頂上付近で下山してくるドイツ人とすれ違った。彼はストックを持っていないので、下山は苦労していた。六時四十分に頂上に付いたが、横殴りの雪で何も見えない。もちろん私たちだけである。時々、ガスが晴れ、ルイス氷河を挟んで目の前のネリオン（五一八八ｍ）が見え隠れする。気温はマイナス五℃ぐらいだろうか。そこそこに四七六〇ｍにあるオーストリア

小屋を目指して降りた。登山道はやはりつるつるである。

小屋には昨日出会ったイスラエル人のパーティとアメリカ人・イギリス人の二人のパーティが岩登りのために天気待ちをしていた。我々はしばらく天気待ちして一息ついたところで、ルイス氷河へ行った。このためにアイゼンを持参したが、上部はクレバスがありザイルなしには危険とのことで、トラバースして対岸へ渡った。ネリオン登攀の取り付きである。パタゴニアの大きな氷河を見慣れていると、これは氷河というよりは、日本で見る五月の大きな雪渓という印象を持つ。岸壁の下に立つと、学生時代の岩登りが思い出される。氷河上を末端まで下り、ルイス・ターンを経て、小氷期の大きなラテラル・モレイン沿いに下り、マッキンダー・キャンプへ戻った。ケニア山の氷河はキリマンジャロの氷河とは形態が全くことなり、中緯度に分布する氷河と同じである。消耗機構が異なるからであろうか。

七日目はティンダール氷河とダーウィン氷河を見に行った。ティンダール・ターンはその礫の新鮮さから、小氷期のモレインに堰止められたものである。ティンダール氷河は日本の研究者がここ十年ぐらい調査している。HKと書いた測量基準点をいくつか見かけたが、かなり古く、研究者の名前は思いあたらなかった。いづれの氷河も後退が著しく、特にダーウィン氷河はこのままでは十年―二十年後に完全になくなるのではないかと思える程、貧弱になっている。岸壁基部に高さ三十mぐらい、幅百mぐらいの氷の塊がべったりと張り付いているだけで、氷の断面が露出していなければ、単なる雪崩のデブリがたまった雪渓にしか見えない。二年前、目の前の岸壁でドイツ人がアプザイレンで遭難死したという。そのザイルと救助用のザイルが垂れ下がっていた。

このように限られた日程であったが、見たい氷河は一応見て、末端の写真を撮影し、一応の成果を挙げた。この次来るときは本当のピーク、バティアンに登りたいものだと思いながら、二日かけてのんびりと下山した。因に、このガイド料は別途千ドルだそうである。

ケニア山のポーター達は、私がキリマンジャロにも登ったと言うと、必ずケニア山とどちらがいい山か、と聞く。やはりアフリカ最高峰の称号を持つキリマンジャロを意識しているのだろう。私がケニア山に登る前、ガイドのスティーブは標高は低いけれど山としてはケニア山のほうが立派だ、と言っていた。これを聞いて、やはり地元のガイドだからだろうと思った。しかし、周りで一週間暮らし、眺めて登ってみると、私も、山としてはケニア山の方が魅力あると思う。日本の立山と剣の関係みたいなものだろうか。

私がレナナ峰に登った日から午前中の天気が崩れた。翌日は強風と雪の中、スコットランド人四人が出かけた。ストックを持っていたので、登頂できたが、道が凍っていて怖かったと口々に言っていた。この日は十時頃からは快晴になった。十二日は風はなかったが、午前中は天気が悪く四三〇〇mまで雪であった。この日、中国人の傭兵数人とドイツ人一人が行ったが、彼らはストックを持っていなかったので、頂上には行けなかった。しかし雪も朝八時過ぎには融けてしまうので、四七六〇mのオーストリア小屋で二～三時間も待機していれば氷も融けて登れるのに、なぜすぐ戻ってくるのだろうと思った。雨期のケニヤ山はストックは必携である。

ケニヤ山はスタンダードで三泊四日で登れるので、いかにも山を登るという格好、装備の登山者に混ざって、アフリカを二～三ヶ月休暇で旅行しているので、ついでに寄ったというヨーロッパ人も多い。足下はしっかりしたスニーカー、または布製の軽登山靴で十分である。ガレ場、ザレ場、湿地があるのでスパッツは役に立つ。四一五十mのマッキンダー・キャンプは朝、霜が降りて凍るので、気温はマイナスになる。それほど寒くは感じなかったが、快適に過ごすのにはしっかりした防寒具とシュラフは必要である。

エピローグ

山に出かける前、最新の地形図を買うべ

くナイロビの本屋に行った。この時、本棚に並んでいた"No Picnic on Mount Kenya"が目に留まった。この本は第二次世界大戦中、ケニヤで捕虜になったイタリア人が収容所を抜け出してケニヤ山に登ったてんまつを書いた本である。山小屋で読むつもりで買った。あとで聞いたら、知る人ぞ知るケニヤ山の古典的な本だそうである。筆者のフェリス・ベヌッツィはイタリア・アルプスでの登山経験が豊かなクライマーであった。ケニヤ山の西にあるニャニュキという町の収容所に入れられていたが、ある日、ケニヤ山を遠くに見て、故郷イタリアでの登山を思い出し、捕虜生活の単調さを破るためにこの無謀とも言える登山を計画した。八ヶ月かけて装備を調達し（自分で作ったのが多い）、食料をストックして、三人で脱走して十日かけてレナナ峰に登った。もちろんバティアンを目指したが、装備不足、トレーニング不足、食料不足、天候などの理由から、登れなかった。地図もなく、経験と勘を頼りに危険な動物が一杯いるジャングルを抜けて、雪が降るケニヤ山をアタックした記録は実に驚異で、感動的である。そして人間の強さに改めて感嘆させられた。特に、実際に山の中にいて、実物の山を目の前に実物の景色その他を体験しながら読むのは、町で読むのとは全く異なる感動を受ける。自然の美しさの記述が実に巧みで詩的である、読み出すとやめられなかった。

この調査でターンをボーリングして湖底堆積物を採集し、過去（数千年？）の環境変動を明らかにするプロジェクトを思いついた。スティーブの話によると、最近ヨーロッパから単発的に一つの池をボーリングしに来ているとのことであったが、報告書はまだ見ていない。十以上も池があるので、システィマティックにボーリングしたら興味あるデータが得られると思う。機材を運ぶのは全てポーターがやってくれるし、ベースとなるロッジは快適である。もう一つ、ルーエンゾウリ（五一〇九m）周辺も学術的に興味深い。スタンリー氷河があるし、氷河地形は未調査であるから、このあたりも、雪氷、地学調査の宝庫である。

康南の秀峰ダンチェツエンラ（五、八三三m）初登頂

二〇〇二年五月二十一日―六月二十八日

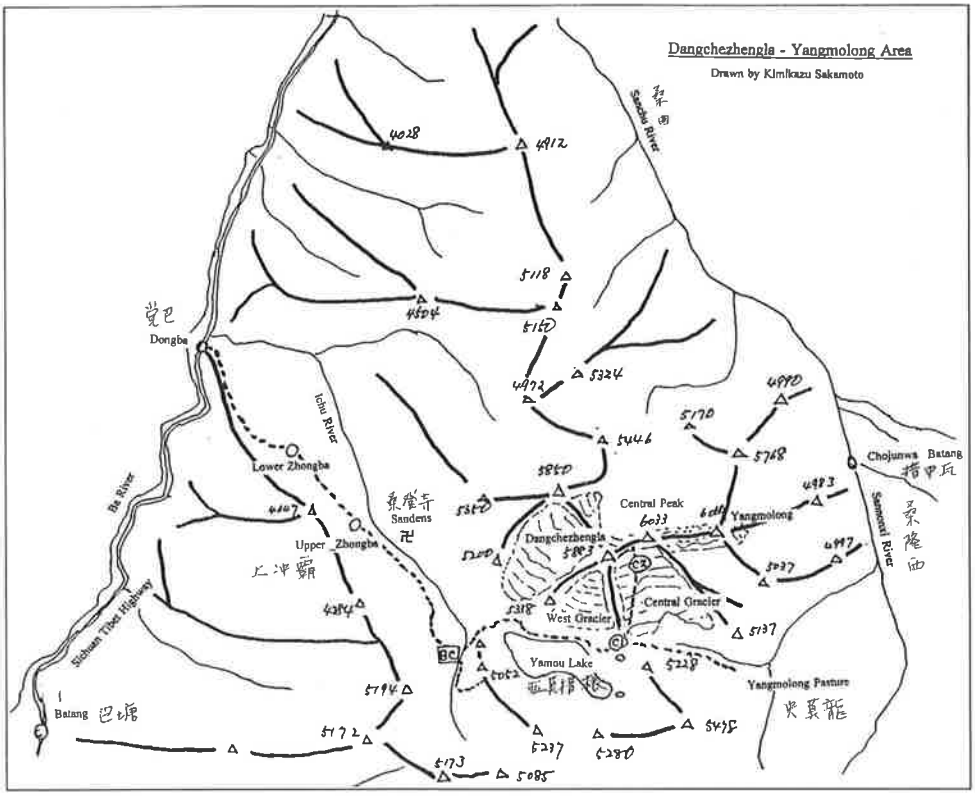
阪本　公一（法　一九六四卒）

二〇〇二年五―六月に、横断山脈研究会より、中国四川省の沙魯里山（シャルリシャン）山系の未踏峰を登りに出掛けた。対象の山は、チェベット自治区に近い街「巴塘（パタン）」の北東十二kmにある央莫龍（ヤンモーロン）六、〇六〇m、その中央峰六、〇三三m、及び西峰の党結真拉（ダンチェツエンラ）五、八三三mの未踏の三山だ。

この山塊は、一九九〇年に日本大学北桜会（工学部山岳会）が北面より六、〇六〇mの央莫龍（ヤンモーロン）を試登し、悪天のため五、四五〇mで撤退したが、詳しい報告は発表されていない。二〇〇〇年五―六月に横断山脈研究会の中村保会長と永井剛会員が、南面から探査し、「近くて遠い山―党結真拉（ダンチェツエンラ）」と中村保氏が同氏の著書「深い浸食の国」の中で、この山塊を紹介している。南西面からなら割と簡単に登れるのではないかとの両氏の報告を受けて、阪本公一（六十二歳、隊長）、宮川清明（六十一歳、登攀隊長）、田中昌二郎（六十一歳）、村山準太（三十五歳）、の四人の小さな遠征隊で登りに出かける事になった。

中国の参謀本部の一〇万分の一の地図で、五、八三三m峰の左側に「党結真拉」と表記されているので、私達も中村説をとって「党結真拉主峰六、〇六〇m、中央峰六、〇三三m、西峰五、八三三mの処女峰の登頂を目標」と明記して、四川省登山協会に登山許可の申請をした。ところが、四川省登山協会からは「央莫龍（ヤンモーロン）六、〇六〇mの登山」として登山許可証が発行され、「2002 Japan Yangmolong Expedition」との遠征隊の名前が私達に与えられた。又、中国登山協会から来たビザ取得用の招聘状にも「央莫龍（六、〇六〇m）登山」とはっきり明記されていた。

成都から、康定（カンディン）、雅江（ヤ



ージャン）、理塘（リタン）、そして四川省の西端の町巴塘（パタン）へと車で移動。巴塘の手前の党巴（ドンパ）村から、二日かけて歩いた四、五〇〇ｍの地、アルプス的な素晴らしい景観の玉曲川（イーチュウ）上流の緑の放牧地に我々のＢＣを建設した。

余りにも美しい所であったので、私達は「ハッピー・バレーＢＣ」と命名した。

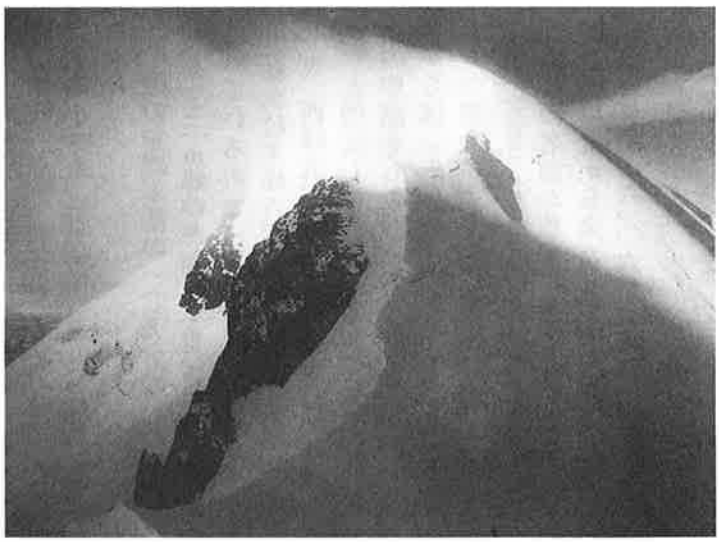
中村氏達が感動したと言う、四、八〇〇ｍの山上湖「ヤモーチョーキン」から更に東方の、標高四、九〇〇ｍにＣ１を建設。何度か偵察したが、央莫龍（ヤンモーロン）六、〇六〇ｍの南面は、岩壁と懸垂氷河、更に稜線から大きく張り出した雪庇で堅くガードされ、我々の実力ではとても登攀は困難と判断した。この山塊は、幾つかの氷河と多くの山稜が入り組み、非常に複雑な地形であり、予想以上に難しい山であることが判ってきた。中央峰六、〇三三ｍと西峰五、八三三ｍのコルに突き上げる中央氷河を登り、中央峰経由で主峰の央莫龍（ヤンモーロン）六、〇六〇に登るルートを考えて、コルの下の五、三三五ｍのプラトーをＣ２予定地とした。

コルからの偵察では、中央峰は稜線が岩壁に遮られて相当厳しく、且つ中央峰から央莫龍のピークにいたる一㎞のナイフリッジの稜線は余りにも遠く、私達四人の隊で、この長距離のアタックに挑むのは余りにも危険が大きいと判断し、中央峰六、〇三三ｍと西峰の党結真拉五、八三三ｍの二峰の登頂に精力を注ぐ事にした。

六月十日のＣ２予定地に装備をデポし、五、五六五ｍのコルまでのルート工作と偵察を完了し、翌六月十一日に一旦ＢＣに降りて、アタックにそなえて六月十三日迄ＢＣで休養した。

六月十四日から再度登山活動を再開し、

党結真拉（ダンチェツエンラ）5,833ｍのファイナル・リッジ



六月十七日に西峰の党結真拉（ダンチェツエンラ）五、八三三mをアタック。上部アイスファール帯のフィックス（五〇m×三本）を越えて、宮川・村山が先行。コルから一段上がった所からは、党結真拉の稜線は、アンデスのアルパマヨのようなナイフリッジになっており、宮川・村山の二人はダブルアックスで登攀した。

鮫の口のようにあいたクレバスを右の方にトラバースし、五〇〇m以上バッサリと切れ落ちている急傾斜の怖い氷の雪面を登った。ナイフリッジになった稜線に戻ると、堅い氷と柔らかい雪の入り交じった不安定な箇所が続き、おまけに雪庇が張り出して、大変微妙な登攀であった。十二時十分、遂に二人は未踏の党結真拉（ダンチェツエンラ）五、八三三mの頂上に初登頂した。朝四時にC2を出発してから、八時間の厳しい登攀であった。

左：党結真拉（ダンチェツエンラ）5,833m
中央：中央峰　6,033m
右：央莫龍（ヤンモーロン）6,060m

田中・阪本は、登攀スピード及び技術的に深追いするのは危険と判断し、五、五六五mのコルで登頂は断念した。

翌六月十八日に宮川・村山で中央峰六、〇三三mをアタックする予定であったが、登攀用具が不足気味であること、二人は党結真拉（ダンチェツエンラ）の登攀で疲れており、且つ中央峰のアタックを延期する事は登山日数の制限からも無理なので、残念ながら中央峰の登頂も断念せざるを得なかった。

右：央莫龍（ヤンモーロン）6,060m

当初の目標であった最高峰の央莫龍（ヤンモーロン）六、〇六〇mには残念ながら登頂することが出来なかったが、これまで誰も手をつけた事がなかった純白の秀峰「党結真拉（ダンチェツエンラ）五、八三三m」を初登頂出来て、大変満足であった。又、この魅力的な山塊を世界の山岳界に紹介する情報を得られた事は非常に意義があり、大収穫であったと思っている。テント、ロープ、赤旗などの登山装備だけでなく、生活ゴミから使用済みのトイレット・ペーパーまで全てを私達自身の手で完全に撤収する事により、私達の遠征隊の方針であった「クリーン登山」を完全実践出来た事は、無事故安全登山と共に、今回の私達の遠征隊の誇りとしたい。

尚、登山活動を終了し成都に戻った時、四川省登山協会より西峰五、八三三mの初登頂者の宮川と村山に登山証明書が授与されたが、登山証明書には「党結真拉五、八三三m登頂」となっており、「央莫龍西峰五、八三三m」とは記載されていなかった。六、〇六〇mの主峰の山名について、再度四川省登山協会及び中国登山協会にて、チェックするよう同行の連絡官に依頼したが、未だ回答が届いていない。

満開の石楠花、紫ツツジ、イエロー・ポピー等の花の香り芳しい、ハッピー・バレ,ーBCの上に、峻厳と聳える魅力的な未踏

の雪氷の秀峰に、爽やかな、すがすがしい登山を出来た私達は、本当に幸せ者と、大変嬉しく思っている。この山塊の美しい自然環境が、何時までも破壊されずに、現在の状態で保護されん事を願ってやまない。

東ネパール・アルン川流域訪問記

今井　一郎（理動物　一九七八卒）

●はじめに

私は、一九九五、九八年にカンチェンジュンガ山麓・タムール川流域を訪問し、地域の自然環境を保護・保全するために進められる政策が必ずしも地域住民の生活改善と自然保護に結びつかないという事態を、九二年に訪れたクンブ地域での見聞と対照させながら論じた（今井　一九九三、一九九五、二〇〇〇）。引き続き、私は二〇〇一年八、九月に東ネパール・アルン川流域上流のマカルー・バルン国立公園を短期間ながら訪問することができた（図）。科研費・基盤研究（B）（1）（代表者・京都大学教授・前平泰志）「ネパールにおけるマージナルグループの教育様式の政治人類学的研究」の研究分担者としての活動だった。マカルー・バルン国立公園と周囲の保全地域は一九九二年に設立され、生物多様性の維持管理と地域発展を統合させるモデルの確立を目指している。私は、クンブ、タムール川流域およびマカルー・バルン地域におけるささやかな経験をつき合せて、自然環境の保護・保全策の検討を試みたかったのである。調査報告は現在作成中であるが、本報では、行動の概略を記すとともに、マカルー・バルン地域の現状を紹介したい。

今回の旅（トレッキング）では、ツムリンタールからアルン川とその支流バルン川を遡り、マカルーBCを目指した。ガイドを務めてくれたのはK・ライ氏であった。出身地はアルン川の西、ボジプール付近で、前回（九八年）タムール川流域の旅でガイドを務めてくれたD・B・ライ氏の甥にあたる。

●行動の概略

八月六日　曇　コスミック・エア航空機でカトマンズ発　ツムリンタール（泊）エアポート前の『ホテル・マカルー』にチェックイン。ホテルの主人（グルン）にポーターの手配を頼むと、チェインプール付近出身のシェルパP君を紹介された。これまでに十回ほどマカルーBCまで行ったことがある、という。

七日　曇　八時三十分発　十二時カドバリ着　昼食　十四時発　十五時マニバンジャン着（泊）

カドバリ付近では、数十人の兵士が銃を担いで巡回中であった。マオイスト（毛沢東主義者）への警戒のようだ。マオイストは中国の文化大革命を支持する共産党の一派に由来するネパールの極左組織である。王制廃止、共和制への移行を主張するとともに議会制民主主義を否定し警察への襲撃やテロ行為を行なってきた。彼らが私たち外国人観光客を襲うことはまず考えられないが、慎重な言動を心掛けねならぬことは言うまでもない。

八日　曇時々雨　七時三十分発　十二時三十分ボテバシ着　昼食　十四時三十分ゴグネ着（泊）ドムシ（ヤマアラシの一種）の棘を用いて料理を突付きながらマカイ（シコクビエ）のチャンを喫す。ロッジの主人はリンブーである。

九日　曇時々雨　八時三五分発　九時五十分チチラ着　十三時デオラリ着　昼食十六時ムレ着　十八時ヌン着（泊）朝食時に三人連れの男たちがロッジに立ち寄っていった。後からガイドのK君が、「彼らはマオイストだそうです」と囁いた。何のために来て何処へいくのかはわからなかった。チチラ付近からの森林帯には路上に甲虫の死骸が夥しくころがっている。デオラリからムレにかけての森にはマオイストが潜んでいるとのことで、デオラリの食堂からムレまで数名のネパール人旅行者と同行することになった。森の中は薄暗く、若干緊張した。ただ、私たちは金目の物を運んでいるわけではないので、別に怖がることはない。同行したネパール人たちの方がマオイストに遭うことを避けたいような雰囲気だ

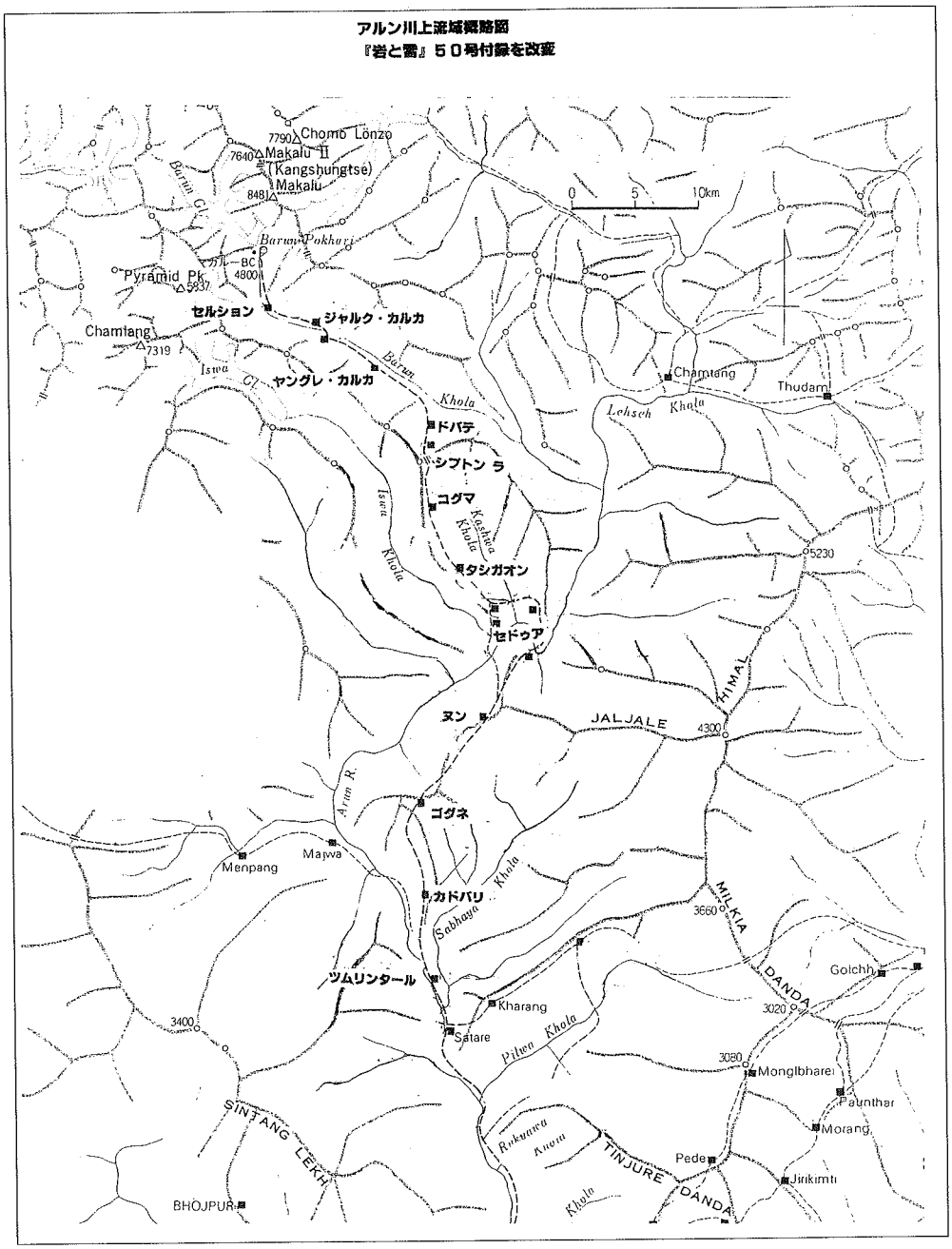
った。ヌンでは、小学校の校庭にCPN（ネパール共産党）の旗が掲揚されていた。

十日　曇後晴　七時四五分発　十時五分アルン川渡河　十三時四五分セドゥア着（泊）ヌンからの下り道、道の両側の草には多数のヒルが止っており、両足に飛びついてきて血を吸われた。マオイストが住民に禁酒を強制しているため、周辺の商店・家庭にはアルコール類を一切置いていない。しかし、こっそり頼むと部屋の奥に招かれて飲ませてくれることもある。夜半から豪雨。

十一日　曇後晴　休養　ロッジ女主人の姉は日本人と結婚して京都に住んでいる、とのことだ。海外の日本大使館によく置いてある日本の写真集をテーブルの上に見つけた。十四時頃ナショナル・パーク・オフィスを訪ね、パスポート、公園入園料の領収書を係官に示し、帳簿にサインした。彼らは、オフ・シーズンなのにトレッカーが現われたので驚いていた。

十二日　曇後雨　八時十分発十二時十五分タシガオン着（泊）十一時三十分頃から降雨が激しくなる。ロッジの女主人が人目を気にしながら持ってきたチャンを有難く飲んだらヒルに噛まれた両足の傷口から出血が止らず往生した。

十三日　雨時々曇　八時発　十五時コグマ着（泊）ヒルに血を吸われながら樹林帯を登る。ガイドのK君は殺虫剤スプレー缶を手にして、ヒルの付いている個所にやたらと噴霧する。ヒルは丸くなって落ちていくが、毒を振りかけられるのは気持ちがよいものではない。私はヒバから抽出した油を含んだスプレーを用いており、ある



程度は防虫効果があったのだが、その効果にも限界があった。コグマのバッティ（茶店）は閉鎖中だったが、横の空き地に幕営した。テント場もあるが、湿原状態なのでテントを張ることは出来ない。周囲はきれいなお花畑になっている。

十四日　晴後雨　七時四十分発　十二時四十分シプトン・ラ着　十三時サノ・ポカリ着　十五時十五分ドバテ着（泊）ドバテには避難小屋があり、上流のカルカから来たポーターたちが食事の準備をしていた。彼らはタシガオンの住民で今まではバルン谷で放牧に従事していたが、これから始まるトレッキング・シーズンに備えて荷揚げをするために降りて来たのである。彼らからセルゲム（カッテージチーズ）を一包み百ルピーで買い取った。チャウリ（ヤクとウシの雑種）のミルクから作ったものである。

十五日　曇　七時三十分発　八時二十分ムンブク着　一三時四五分ヤングレ着（泊）ムンブクからバルン川への下降と右岸の崩壊地形の横断約一時間は見上げる崖からの落石が怖くてスリルがあった。午後になると落石が頻繁である、という。その後ヤングレ・カルカまでは段丘上の草原を気持ちよく進んだ。テントの周囲は湿地状だった。トレッキング・シーズンでないからか、カルカには売店がなく、商品もほとんど置いてない。チャウリ乳のダヒ（ヨーグルト）を味わうが、絶妙の味であった。

十六日　晴後雨　八時三十分発　十二時五五分ジャルク・カルカ着　一時二十分幕営（泊）

ジャルク・カルカ上部の幕営地を目指すが、左岸からの濁流に行く手を阻まれる。川幅は十メートルもなく細い丸木が一本渡してあるので地元の人たちにとっては左程の難所ではないだろうが、丸木橋の直下に白濁した流れが渦巻いている。生憎ザイルをもって来なかったので、確保して渡ることも出来ない。もし落ちた場合には、確実に十メートルは流されてしまう。私自身足を滑らせる可能性が一番高かっただろうが、ポーターでも重荷を背負ったまま渡れば危険な箇所である。残念だが撤退することにした。翌日セルション・カルカまで進めば、そこからマカルーBCまで短時間で往復できただけに無念だった。私は装備、情報収集が不十分であったことを身にしみて反省せざるを得なかった。濁流手前のカルカ跡に幕営した。

十七日　雪後雨　八時五五分発　十一時四十分ヤングレ着（泊）早朝もう一度渡河点まで戻って見るが、他に渡河可能なポイントがなく、仕方なく引き返す。ヤングレ・カルカの人たちは、私たちが戻ってきたので驚いていた。夕方になり、ジャルク・カルカから女性三人がチャウリなど家畜を追って降りてきた。右岸に家畜を放し、岩壁に青いシートを張って泊る模様。

十八日　雪後雨　八時五十分発　九時四十分右岸の大崩壊地　十時三十分通過　十三時三十分ドバテ着（泊）それまではトレッキング・シューズを履いていたが、足に水が入るので軽作業用の長靴に履き替えて歩いてみる。なかなか快適だった。始めから長靴を履いていたら良かった。

十九日　雪後雨　八時十分発　十時四十分　シプトン・ラ着　十三時三十分コグマ着　昼食（泊）雨の中を黙々と歩く。シプトン・ラの周辺でチャウリを放牧していた。コグマに着くと、先行したポーターのP君の姿がなく、通りすがりの人々に聞いてもわからないので、K君はやや焦っていたようだ。やがて、P君は付近の岩棚の直下に設営していたことが判明して事無きを得た。スペースは狭かったが、降雨を避けることが出来る良い幕営地を選んでくれた。

二十日　雪後雨　七時二十分発　十一時二五分タシガオン着（泊）往きと同じロッジに泊り濡れた衣類をバルコニーで干す。壁には観光客用にマカルー・バルン国立公園案内図と説明文が張ってあった。ここにも「貧困を無くさねばならない」と何ヶ所も書かれていたのでうんざりした。最近は日欧米などの援助組織によって「貧困」撲滅が叫ばれているが、これには用心した方がよい。実際にはある地域で貧困を無くすことが出来たとしても、同時に別の地域で新たな貧困が生み出されることになるかも知れないのだ。そもそも人間の豊かさは経済的・物質的な尺度でしか計れないものであろうか。外国の組織や機関の援助活動の

あり方について考えさせられた。

二一日　曇時々雨　八時五分発　十二時五分セドゥア着（泊）昨夜は激しい雨だった。タシガオンのロッジ主人の妹が二〇〇〇年にネパール人女性として初めてエベレスト登頂者になったとのことで、それを祝う横断幕がバルコニーの壁に張ってあるのを出発前に見つけた。本人は現在アメリカで働いている、とのことだ。ネパールに留まっていても働く場が限られているので、自らの能力を試す積もりで外国に渡ったのだろうか？朝ポーターのP君が何故かいつまでも出発しようとしなかったが、ガイドのK君は「そのうち来るでしょう。」とのんびりしていた。しかし、セドゥアに着いた後もなかなか到着しないので、やや焦り気味である。タシガオンを出てから、何度か谷間で銃声が聞こえた。たまたま私たちと前後して歩いていたセドゥアの女性によれば、マオイストに対する威嚇射撃だとのことだが、野生のシカを撃っているのかもしれない。K君は全く意に介していないが、私は何となく不安だった。

二二日　曇時々雨　休養　悪天候のため休養にした。P君は昨日夕方になってようやく登場した。タシガオンで飲みすぎて金を使い果たしたために遅れたようだ。セドゥアの老人から当座の金をたてかえてもらったようで、後で私のところに来て給料の前借りを要求した。セドゥアでは「妻と子供のためだ」と言って布地を買い込み私たちに見せに来たのはよかったが、ロッジの女主人から「カドバリの方がよっぽど安いわ。ここで買うなんて馬鹿みたい。」と嘲られてしょんぼりしていたのが気の毒に見えた。

二三日　雨後曇　休養　朝から悪天候のため本日も休養にした。雨天でも人々は家畜の飼い葉を刈るために山に入っていく。

二四日　曇時々雨　七時二十分発　九時二十分アルン川渡河　十二時十五分ヌン着（泊）集落の家の壁には、マオイストのキャンペーンが珍しいことに英文でペイントしてあった。「Long Life People`s War, Down Imperialism and Feudalism (CPN & Maoist)」と書かれていた。夕食のおかずはマチャ（魚）だったが、私に出された魚は骨ばかりだったのでがっかりした。

二五日　曇時々晴　六時五十分発　九時ムレ着　十時五分デオラリ着　昼食　十一時二五分発　十四時チチラ着　十五時十五分ゴグネ着（泊）デオラリでヌンからカドバリに向かう二人連れの女性に会う。山の中とは思えぬこぎれいなスーツ姿なので驚いた。彼女たちは軽やかな足取りで私たちを抜かして行った。チチラ付近では、村人が草刈りと道の修復のため働いていた。ロッジには何と小型テレビが置かれており、インドの番組を放映していた。近所の人が何人か集まって観ている。女性たちがマンゴーの早食い競争をしている。この種の催しは日本だけでなくどこにでもあるものだ。九二年にもクンブで見かけたが、この国では各地で徐々にソーラー・システムによる発電が広がってきている。台所に来ていた年配の女性二人にチャンとロキシーをおごって少しばかり話を聞いた。一人はグルン、もう一人はジミ・ボテという民族名を名乗っていた。ジミ・ボテという名称は初耳だった。アルン川上流部に居住するチベット系の民族だと言う。

二六日　曇　昨夜は豪雨だった。八時発　九時五十分マニバンジャン着　十一時四十分カドバリに入る。十二時十五分バルン・ホテル着　昼食（泊）カドバリのような比較的大きな町でもビールが手に入らずがっかりした。昼食後、The East Foundation（TEF）のオフィスを訪問して職員のT氏に面会した。アメリカに本部があるThe Mountain Institute（TMI）というNGOの下部組織のようだ。私がマカルー・バルン国立公園に関する資料が欲しい旨を告げると、T氏は「担当者が資料庫の鍵を持ったままカトマンズに行ってしまったものですから」と言いながらも快く文献資料を渡してくれた。有難かった。夕方になって、TEFに勤務しているネワール女性の訪問を受けた。日本で勉強し働きたいが何処かスカラシップ（奨学金）がないだろうか、という問い合わせだったので、「勉強するのか働くのか目的を一つにしないとビザが下りませんよ」「日本で暮らすなら日本語会話能力が必須だからカトマンズの

日本語学校で勉強しなさい」などアドバイスしておいた。彼女はＪＩＣＡの奨学金を得てバンコクで二年間ほど暮らしたことがあるそうだ。

二七日　曇　七時二十分発　九時四十分ツムリンタールの『ホテル・マカルー』着（泊）昨日カドバリから電話をかけていたおかげでエア・チケットは確保されていた。ツムリンタールでもビールは手に入らなかった。マオイストの圧力もあろうが、この季節はビールを買うことが出来る客（外国人観光客）がほとんど来ないことも大きいだろう。空港周辺の緑が以前より鮮やかに見えた。

二八日　雨後曇　フライト・キャンセルのため滞在　午後一時過ぎに空港でチェックインした。他社の便は予定通り運航していたが、私たちが搭乗する予定だったコスミック・エアだけ欠航になった。せっかく待合室まで入ったのにホテルに逆戻りだ。ホテルでは、カトマンズのトレッキング・エージェントに呼び出されて仕事に向かう人々数名に会って話を聞いた。これからトレッキングシーズンなので、カトマンズに向かう人びとが増え始めたのだ。

二九日　曇　十四時二十分発　十五時五分カトマンズ着　カトマンズでも雨が降っていた。ホテルに着いてＫ君と茶を飲んでいたら、月原ベコ君が戻ってきた。

●総括

今回のマカルー地域トレッキングでは、アクシデントに見舞われず無事に戻ってきたものの、当初目指していたマカルーＢＣまで到達することが出来ず、反省すべき点が多かった。モンスーン末期という天候不順な期間を選び、パーティの装備・食料の準備が足りなかったのだから、当然の結果だったかも知れない。ただ、外国人トレッカーには一人も会わないゆとりある旅を楽しむことが出来たのは、私の目的からすればむしろ有難かったのである。さらに、私の過去五回にわたるネパール・ヒマラヤの旅がすべてポスト・モンスーン季だったので、今回のように辺り一面が緑に包まれ花に囲まれた旅には新鮮な印象を受けた。ネパール山村における自然環境と住民生活に関する調査報告は別稿に譲る。私は二〇〇二年八～九月にも同じ科研費での調査を計画しているが、地域の選択と行動計画を立てるにあたり今回の経験を生かしたい。

もう一度カドバリのＴＥＦオフィスを訪問して資料を収集したいが、その他に日本のＮＧＯが活動しているムスタン辺りに入って援助活動の実態について予察したい。

参考文献

今井　一郎（一九九三）「『世界の遺産』地域の自然と人―ネパール・クンブと白神山地の暮らし―」ヒマラヤ学誌　第四号、京都大学ヒマラヤ研究会。

今井　一郎（一九九五）「『タムール・シエルパ』との出会い　東部ネパール、タムール川流域の調査より」ヒマラヤ学誌　第六号、京都大学ヒマラヤ研究会。

今井　一郎（二〇〇〇）「『タムール・シエルパ』その後―東部ネパール・タムール川流域の調査より―」ヒマラヤ学誌　第七号、京都大学ヒマラヤ研究会。

南アルプス縦走（甲斐駒ヶ岳から光岳まで）とその山小屋最新事情

饗場邦光（法　一九六一卒）

私は退職時に退職を記念して長い山行をしたいと予ねてより思っており、その対象として南アルプス全山縦走を退職三年前頃から検討を始めた。その縦走の基本は

① 一人山行とし、

② 荷物を軽くするため山小屋を利用し昼食は小屋で弁当を手当てする。

③ 季節は天候が安定している七月下旬とすることとした。三年前の還暦記念山行である蓼科山（長野県）から高尾山（八王子市）までの十日間の縦走経験をふまえて検討を重ねた。今回二年掛かりでその縦走ができたのでここに報告する。

一人山行で計画したが山本農夫彦君（高校時代の同級生で京大経済学部卒、若い頃

は山行の経験があまりないがここ十年横浜みろく山の会（特定非営利活動法人）に所属し精力的に登山に傾倒）が参加することとなり、二人山行となった。一日の行動時間は地形図のルートタイムの二割増しとし、一回の十二泊計画を立てた。

（1）二〇〇〇年

① 七月二四日（月）（晴れ）

梅雨明け（平年七月二十日）が今年は三日早かったが予め計画した通り本日、中央線高尾駅で山本と落合い、甲府駅下車、バス（臨時便）で広河原経由、北沢峠の長衛荘着。長衛荘はシーズン最盛期でもあり予約が必要。小屋は満員。

② 七月二五日（火）（曇り、のち雨）、甲斐駒ケ岳往復が本日の計画。

仙水小屋経由早川尾根を登る。仙水峠付近から雨となり、風雨はだんだん強くなり駒津峰では立っていてバランスを失う程になったので頂上は断念し双児山経由で長衛荘に下山、長衛荘にて昼食。明き弁当の空は引き取ってくれず。北沢峠近くの大平山荘着。本日の行動時間は七時間三十分。夕方には雨も上がり山荘から北アルプスが見える。宿泊客は十人程度。

③ 七月二六日（水）（曇り、のち午後晴れ）、仙丈岳経由両俣小屋までが本日の計画。

仙丈岳手前の避難小屋跡に長谷村が小屋を新設。風力発電によるバイオトイレ（電気による保温により微生物を培養し水洗汚物を分解する方法）を試運転中であったが冬にどうなるかが課題と思える。午後から晴れて高山の花を愛でつつ仙塩尾根を快適にくだり、野呂川越え経由で両俣小屋十五時着。本日の行動時間十時間四十分。両俣小屋は野呂川上流沿いにあり開放的で近くまで車が入るせいかゴミを引き取ってくれる。食事内容も良く、天気図のサービスもあった。台風六号の発生接近を知る。宿泊客は数人。

④ 七月二七日（木）（晴れ）北岳、間の岳経由農鳥小屋までが本日の計画。

野呂川左俣沢沿いに左俣大滝から中白根沢の頭近くで尾根に出る。某大学山岳部パーティ（四人）と前後しつつ登るがそのパーティは間隔が開きバラバラだ。

北岳を経由し、間の岳への登りで不整脈の予兆（胸騒ぎがし、胸苦しい）を感じる。遺言のことなどを考えながら、歩を進める。山本は健脚でペースも速いので明日からは私がトップを歩くことを話そうと思う。農鳥小屋着十四時四十分。

本日の行動時間は九時間五十分。農鳥小屋は主稜線上にあり小屋使用の水は雨水、登山者の使用する水は主稜線から十五分位谷筋に下って採取。

その登りでは不整脈は感じない。

青森から来た一人山行の七十三歳のおじいちゃんや三十歳の息子の鍛練と十二月にアコンカグアへ出発予定のため自分の体いじめ（と彼はいう）を兼ねて光岳から縦走中の登山者（但息子は三伏峠から下山）と同宿。小屋は九割程度の客。夜中に本日の不整脈の予兆を考え明日以降の山行を続行すべきかどうか迷う。結局不整脈が発生した場合の危険と、山本への迷惑を考え、明日下山を決意し、朝、山本に話す。山本の体力からすれば一人での山行続行はできるからそれを勧めたが山本も一緒に下山することになった。残りは来年に実施することとする。

⑤ 七月二八日（金）（雨） 本日は縦走計画を断念して大門沢を下り奈良田温泉まで。

朝から雨で農鳥岳では視界も利かず、ひたすら大門沢を下る。大門沢小屋で奈良田温泉の宿泊予約をし、登山道入り口まで車が迎えにきてくれる。本日の行動時間七時間。

⑥ 七月二九日（土）（晴れ） バスと列車で身延経由にて帰京。合計五泊六日

（2）二〇〇一年

① 昨年泊まった両俣小屋で昨年と今年の繋ぎをし、昨年残した行程について九泊十日の計画を立てる。今年は例年より九日も早く梅雨明けしたが七月二十日出発のこととする。

② 七月二十日（金）（晴れ） 本日は両俣小屋までの予定。

朝、山本と中央線高尾駅で落合い甲府から広河原に入るが、海の日に始まる三連休のため、マイカー利用の登山者が多く広河原へのバス路線が渋滞し約二時間遅れる。

後述のとおり小屋も満員で夏山最盛期の三連休は今後避けるべきと痛感する。

野呂川出合でバスを降り二時間歩いて両俣小屋十七時着。今夜はこの小屋では昨年、今年を通じて最高の宿泊客（三十五人）という。夕食に天ぷらが出た。

③　七月二一日（土）（晴れ後雨）　本日は三峰岳経由熊ノ平小屋までの計画。

仙塩尾根から、早川、大井川、三峰川の三川の分水嶺である三峰岳（某山岳書には三川の水源は間の岳との記述があるが三峰川の水源が三峰岳であることが登って見るとよくわかる）経由で熊ノ平小屋に十二時四十分着。本日の行動時間七時間。

十四時頃から夜半まで雨。この夜の同小屋も満員で互い違いに寝る。他の同宿者の話では前夜の北岳山荘は一畳に三人の割の混みかただったという。

④　七月二二日（日）（晴れ）　今日は塩見岳を経て三伏峠小屋までの計画。

前夜の雨露に濡れたルート両側の草木でズボンはびしょ濡れ。でも歩行中にこれも乾き塩見岳頂上でゆっくり北部南アルプスの景観を楽しみ、塩見小屋を経て日本一高い峠（二六〇〇m）にある三伏峠小屋着十四時五十分。本日の行動時間十時間五十分。この夜は連休の混雑は去り床面積の三分の二は空いていた。

⑤　七月二三日（月）（晴れ）　今日の予定は荒川岳を経て荒川岳避難小屋まで。

昨日までの歩行スピード、小屋着の時刻などから今日はできればもう少し行動時間を延ばして荒川小屋まで行くべく朝四時小屋出発。小河内岳、同避難小屋、高山裏避難小屋を経て、昼食も昨日までの一時間から三十分に短縮して先を急ぐ。

烏帽子岳・河内岳・高山裏避難小屋へ続くルートはほぼ尾根上にありその西面は鋭く切れ込んでおり、覗き込むと恐怖を感じる。荒川前岳へのルートは木陰もなくピーカン照りのガレ場を登る。荒川中岳着十三時四十五分。時間的余裕があるので荒川小屋まで下ることとする。荒川小屋着十五時。本日の行動時間十一時間。

荒川小屋は新小屋を増設、使用する水はポンプで沢水を汲み上げ、トイレは水洗・放流方式。小屋は空いていた。夕食はサラダ付きでカレーはお替わり自由。

⑥　七月二四日（火）（晴れ）　今日は昨日までの歩行スピード、行動時間などを考え、本日の予定を百間洞山の家までの計画を変更し聖平小屋まで延ばすこととする。

この為、朝食も弁当で持参し、朝三時出発。ヘッドランプを付けていたが大聖寺平でルートを見失ったので、朝食を取りつつ夜明けを待つ。ルートはすぐ見つかり先を急ぐが、七十八歳の元気な一人山行のお爺ちゃんに抜かれる。

赤石岳で学生時代の赤石沢遡行の記憶を思い出し、更新立て替えられた百間洞山の小屋の前を通って、半円形のように兎岳を経て聖岳頂上に十五時三十分着。

それから二時間かけて聖平小屋着十七時三十分。本日の行動時間十四時間三十分。

疲れとすでに夕食時刻が過ぎていて急がされて食卓についたこともあり食欲がない。でも今日は赤石岳、聖岳と大きな山を二つ越えた満足感と、明日はいよいよ最後だと思いつつ眠りにつく。

聖平小屋も新小屋を増設。でも水、トイレ関係は旧態のまま。客の入りは六割位か。

⑦　七月二十五日（水）（晴れ）　今日も茶臼小屋までの計画を変更して光小屋まで延ばすこととする。

今日も朝食弁当を持ち三時三十分出発。上河内岳下で山本が気が付いて高校同年生だった山田君と高校卒業以来バッタリ行き合う。茶臼岳から易老岳の間はお花畑、池があり、将来気候条件によっては山上の楽園になるかも知れないと思いつつ易老岳を経る。易老岳頂上は樹林の中にあり周りの景観は楽しめない。

十五時以前到着のお客のみに夕食を提供するという光小屋の前情報に先を急ぐ。

少し下って緩やかな沢道を登り詰め、静高平を経て湿地帯に出ると光小屋が見えてきた。いよいよ今縦走の最後だ。なだらかな斜面に立つ、更新なった新しい光小屋着十四時。本日の行動時間は十時間三十分。

小休止後、翌日の水を十分下った沢で採水後、光岳へ、十六時二十分頂上着。

ついにやった、長年の念願が果たされ山本と握手を交わす。

甲斐駒から茶臼岳までの峰峰の頂上は岩石なのに対し、光岳頂上はなだらかで、周囲は樹木に囲まれ見通しは利かない。光岳の名前の由来にもなった西南にある白い巨岩まで足を伸ばす。この巨岩から南方を見ると、寸又川に向けて急激にその高度を減じる様子がよくわかり、南北百二十キロの長い南アルプスもここが終点かの感を強くする。

小屋で使用する水はポンプで沢水を汲み上げ、トイレはバイオによる分解方式。

客は十名程痩。夕食は圧力釜で炊いたご飯、天ぷらがでた。

光岳が最後という六十七歳の百名山達成者（スキーインストラクター）に出会う。明日は風呂に入ってビールが飲めるぞと思い、今年は不整脈発症もなく縦走達成の満足感に浸りつつ床に就く。

⑧　七月二六日（木）（晴れ）　今日は下山後、町で一泊する計画を変更し、他の二人組と一緒にタクシー（小屋で予約）を利用し温泉に入って駅まで行き今日中に帰京することとする。

朝食後五時二十分出発。易老岳経由易老渡着十時。今日の歩行時間四時間三十分。易老渡でタクシーに四人で同乗し飯田線平岡駅着十一時四十分。

タクシー代一二六〇〇円。新築の駅ビル内温泉に一週間振りで入り、ビールで乾杯後飯田線、中央線経由で帰京。

⑨　今年は九泊十日の計画を立てたがスピードアップ（計画は休憩時間を含めてルートタイムの二割増しで日程を組んだが、好天もあって結局一割増しで歩けた）と、一日の行動時間の延長（二日間は十一時間、十四時間三十分歩いた）により、山小屋宿泊日程を二日間、下山後可能な所はタクシーを利用して下山時民宿利用を止めたことにより一日短縮、合計三泊三日短縮でき結局六泊七日で縦走できた。二年合計では十一泊十三日。昨年の体調不良がなく1回で全山縦走ができていれば九泊十日で可能であった計算になる。

⑩　費用については、一泊一万円で予算を立てたが、二年分合計でＪＲ運賃含めて一人約十一万四千円掛かった。なお、山小屋利用料は一泊七千円から七千五百円、弁当代は千円。

⑪　南アルプスの山小屋は最近の健康志向の高まりの中で中高年を中心とする登山ブームを背景に近年、更新が続いている。仙丈小屋、荒川小屋、百間洞山の家、聖平小屋、光小屋などここ数年以内に（特に南部は国体に備えて）更新、または増設された小屋だ。バイオトイレも今後増えるものと思われる。登山者では中高年、とくに女性の姿が目立つ。

⑫　下山後、予め登山計画書を提出していた飯田、阿南両警察署に無事下山した旨電話を入れるとともに、帰宅後手紙を出す。また、事前調査で資料など情報を頂いた南信濃村役場にもお礼の手紙を出す。

（二〇〇一年八月記）

山の文学・随筆、研究（その1）

文化としての登山

川瀬　裕史（法学部　一九五六卒）

文化と文明

ひとに楽しみをあたえるのが文化である。楽しみはひとさまざまである。音楽、絵画だけでなく、ランニングもひとをハイにさせるのだから文化である。自虐的なのもあれば、苛虐的なのもある。

煙草も、麻薬も、反社会性ありとされているが、文化であると言える。登山もまた文化のひとつである。さて、どのような文化なのだろうか？

文化のなかで、文明に協調しえないものは博物館に行く。その楽しさを広く分かちあえる社会的価値のある初登攀が少なくなった。社会的価値が減少したのでマスコミがのってこない。マスコミという文明が協調しにくい登山文化もそうなるのだろうか？

登山の文化について考える前に、文化と文明についての私見を述べさせていただく。文化は文明の下部構造であるとする定義づけをする学説があり、ドイツ文化は西欧文明の一部であるなどという取り決め方があるが、ここではそのような定義に従わないと、ご理解いただきたい。

〝文化のなかで、文明に協調しえないものは博物館に行く。〟という時、文化と文明とは異なるものと考えているからである。

ここでは、文化あくまで主観的価値であり、文明は社会的便宜および制度であるとして、区分けをして話を進める。文化は〝すきずき〟で、物質文明は〝便利〟、制度文明は〝社会的な決まり〟とご理解いただきたい。ひとが価値であるとするのは、本来は文化であり、文明はその価値を効率的にするための方法や手段である。もっとも、物質文明のなかにも、手段に過ぎない乗り物の〝スピード〟そのものが〝楽しみ〟として文化になってしまうものもある。　物質文明の新文化創造というようなことが、物質文明の利器の発達とともに増加している。この場合、スピードを楽しむのは文化、スピードを創り出す技術は文明と区分けする。さらに、技術そのものでなく、新技術を作り出すこと自体が楽しみというのも、これまた文化である。文化は主観。文明は、物質文明は客観的な便利さと覚えておいていただきたい。

文明には、二つあり、物質文明と制度文明に分ける。物質文明はその効率を求めて非可逆的に進歩する。物質文明は、より〝便利〟をもとめて一方向に進歩すると言える。外部要因で突然消失した場合を例外として、都市生活のための下水や上水を、利用者が自ら廃却するようなことは起こらない。青銅の斧鉞は博物館にしかないし、弓矢はスポーツ文化として残るが、殺人兵器としては残らない。薪炭はバーベキュー用に残るが、毎日の都会生活の煮炊き用には残らない。それらは、今では文明的便宜であるより、文化的価値として認められる。

もうひとつの文明は、制度文明で、民主主義とそれを支える諸制度が現在の世界各国の定番になっている。制度文明はその時代の、その社会の主観的価値実現のための便宜であるといってよい。これはけっして、非可逆的に進歩するというようなものではない。

民主主義とそれを支える諸制度の歴史はまだ短い。民主主義は中産階級が多数であることと、人権擁護の諸手続きによって支えられているが、このような民主主義支持基盤が不充分な地域は地球上に数多い。さらに、未来社会で民主主義が定番たりうるかも、未知の要素が多い。資本主義や自由市場原理などはさらに、未完成な面が多く、とても定番などといえない。制度文明では、せいぜい民主主義が、いまのところ〝決まり〟であると言える程度である。その内容とは、基本的人権。曰く、身体、生命、財産の安全。信教、言論、出版の自由、等々。それらを社会的価値として認めることが〝現在の世界で〝決まり〟だと言えよう。

文明でも、制度文明のほうは、本来は主観的価値なのであり、それを社会として客観性をあたえたのであり、〝決まり〟にしたのが制度文明なのである。こういう文明と文化の定義づけだと、文化こそ衝突するが、文明は衝突の可能性は制度文明だけだということになる。アラブとイスラエルの紛争も文化の衝突であり、制度文明として衝突しているわけではない。アラブはまだ民主主義を持てないか、時期尚早なだけである。また、Globalizationは、物質文明や、制度文明でのことで、文化は多様化といったほうが正しい。もっとも物質文明や、そのときの制度文明に協調する文化が優勢になるのが現実である。

登山文化

さて、登山文化に焦点をしぼる。文明に協調しない文化、たとえば、文字をもたない言語は社会的価値をうしなって博物館に行く。文字がなければ国家を経営できないからだ。集団戦争兵器は、こん棒から石器、青銅器、鉄器鉄砲、大砲、ミサイルと、非可逆的に進歩した。核兵器の進歩を殺人大量破壊兵器兵器としてSTOPしようかという現象は人類文明史の例外的なことである。これが物質文明進歩の非可逆性であり、この進歩に協調しない社会は、その文化とともに消滅してきた。

マスコミは文明として大量伝達方法であり、のろし、雄叫び、手紙、駅伝、電報、電話、にまさること格段である。登山の楽しみを分かち合うには、それだけの社会的価値がなければマスコミは取り上げない。それはマスコミという文明に乗るすべを失

いつつある文化であると言ってよい。その運命は博物館行きなのだろうか？そんなことはあるまい。初登攀という部数に限りのある贈呈本の時代が去り、新書や文庫本の時代になっただけのことである。ＡＡＣＫの初登攀、Terra Incognitaの時代は過ぎ去ろうとしている。

しかし、登山人口はますます増えつづけて、日本で一千万人に達し、今後も増える一方だろう。違うだろうか。マスコミがゲートボール程度の興味を示さなかったとしてもかまわないではないか。登山愛好家は、現在は、欧米と日本に密度がたかいとしても、いずれ世界中で愛好家が増えてくる筈だからである。なぜ、そう思うのか？それは登山文化の文化ジャンルとしての特異性にある。

近代アルピニズム

さてこれから先、ひとつの文化を、これは生きつづけ、ますます発展すると、肯定的に述べようとするとき、表現が文学的、主観的、つまりは、ひとりよがりになって行くことを許していただきたい。この文章は登山愛好家のＡＡＣＫのNewsLetterに書くのだから、許されて当然と思う。それは、オペラ好き、モーツアルト好きがその楽しさを語りあうのと同じである、好きという偏見を共有できることの楽しさを味わおうというわけである。

まず、ＡＡＣＫの皆さんのよくご存知の著述の引用から始める。梅棹さんが第一地域、第二地域という区分を、その〝文明の生態史観〟で述べている。桑原さんが〝登山の文化史〟のなかで、〝古代エジプト、インド、ペルシャなどは文化は発達しておったが、登山は一向に発達していない。〟さらに、〝中国では文化全般のなかで、山というものの占める地位が西洋よりずっと重かったことは間違いないところである。〟（中略）しかしその関心は、〝山岳崇拝あるいは神遷説に関するものが多く、実際の登山の関するものは極めて少ないのである。〟又、〝東洋では、ついに近代登山は自分の世界のうちからは発生しなかったのであるから、これを西洋近代の前におくのが正しいと思う。〟〝中国人の有名な登山家というのは聞いたことがない。〟〝スイスのアルピニズムの中心地で、顔の黄色い人間がいたら、日本人とみてまず間違いない。〟とも書いている。現在でもかなりそれに近い状況なのではあるまいか？

僕の考えでは、近代登山や登山愛好は、今もなお、梅棹さんの、第一地域に密度が高く、第二地域はさっぱりではないか、と思う。

何故か？桑原さんの説明は、〝西洋では山を龍や悪魔の棲家と考えるために、山と人間とはいわば相敵対している、対立している。従ってその悪魔を追い払ってしまえば山は単なる土のかたまり、物質となる。すなわち人間が自由に処理しうるところのものになる。そこで山岳征服ということが可能になるのである。中国では、一般に東洋では、自然を物質とは考えない。しかしまた神といっても、位を授けたりするところを見てもわかるように、人間と感情がなんとか通じうるものと考えている。従って犠牲を供えて御機嫌をとったり、また脅かしたりすることもできるわけである。（中略）――これは一種の人間中心主義ということができ、また自然主義ともいえるだろうが――自然にたいする研究が起りえない。また自然を征服して人間の支配下におこうという考えもおこりえないのである。東洋に自然科学が成長せず、また真のアルピニズムが発生しなかった理由の一つは確かにここにあると思われる。〟結論は、桑原さんの、〝私の考えによれば、近代アルピニズムの特色は、近代科学精神と結びつき、かつ非宗教的だという、二つの点にある。〟近代科学精神のほうは、ほとんどの登山愛好家が喜んで同意されるであろう。ところで、非宗教的のほうはどうだろう？桑原さんの説明は、それは宗教改革によるキリスト教全体の権威がおち、プロテスタンチズムが一種の合理主義ふりかざして迷信的或いは神秘主義要素を宗教から消し去った、ことにある。と書く。思い出していただきたい。梅棹さんが、第二地域で閉口するほど宗教性の密度が高いと言っていたことを。そしてそこでは、登山愛好家密度はかなり低いのである。

最後に桑原さんはもう二点、一つは〝ルネッサンスによって個性の自覚が行われ、個人のいさおしということが重視されてくる。これが登山の方にも漸次現れてくる。第二に安定した市民社会が形成されてこそヨーロッパでも登山者が激増した。（中略）明日の命もわからぬ乱世にわざわざ危険な山に行くもののあろうはずはない。（中略）とも述べている。これらがまた近代アルピニズムのベースであると。登山はそういう文化なのである。近代科学精神に、非宗教性に、近代的自我、そして安定した市民社会。そういうものがあって、アルピニズムが生まれた。と桑原さんは言う。登山愛好家心せよである。かなり大げさなからくりというか、背景をもっている。そんな文化がほかにあるのだろうか？ゲートボールとかなり違うかなあという気にならないか？

僕の登山文化論

さてこれからは自説の登山文化論である。

近代科学精神と宗教性は、反対の極にある関係である。日本は近代化と同時に近代アルピニズムにのめりこんで行った。梅棹さんの第一地域国家の面目発揮である。近代科学精神と非宗教性は日本には戦国時代からあったといえないか。織田信長はその旗手であった。鎖国はすでに非宗教的で近代科学精神をもった時の為政者にってなされた。物質文明（前半に述べた自説の文明）のためには鎖国はいけない。しかし、キリスト教信者のなかに、領土を寄進をするものまでできたこと、戦国時代が終わりやっと固まりつつあった日本の封建的制度文明を改めて突き崩す危険があったこと、仏教のドグマに代わるだけにすぎないキリスト教のドグマを押し付ける文化を嫌ったこと、そのために、高い代償ではあったかもしれないが、新たな物質文明の流入を拒否したと見ることができる。鎖国は仏教や神道を守るためになされたのではないと思う。かくて、日本の物質文明と制度文明は開国まで、進歩と変化をやめ、固有文化は爛熟した。

開国は最初は、尊皇攘夷の掛け声で始まっている。まず、日本固有の文化は守りますと表明したのである。その上での維新である。だから日本をまとめることができた。これが、最初、尊王開国ならまとまらなかった。このすり替えは巧妙である。もっとも低開発国の近代化は、いずれも同じ形で、固有文化を傷つけない方法で始まるようである。しかし、物質文明については、なにがなんでも西欧に追いつかねば国家としての破滅であるととがわかっていたのである。開国後は、廃仏毀釈の旋風をおこし、神道は天皇に収斂してしまった。しかし、日本仏教は、近代化にたいした支障にならぬことにすぐに気がつく。仏教は戦国時代以降、日本人の理性を左右する文化でなかったのである。神道は元来、理性と無縁である。日本には、開国のとき以前から、近代科学精神と非宗教性が行動規範として素地にあったのである。かくて日本は、近代アルピニズムにもすぐはいっていった。

次は近代的自我の自覚である。明確に、これを言葉で打ち出したのは、デカルトである。〝われ思う故にわれあり〟がそれである。僕なりに言わすれば、その意味は、〝世界の中心は、おのれである。〟ということであろう。逆にいえば、おのれなくして、なんの世界ぞ、となる。近代的自我の日本での芽生えをどこに求めたらよいのか、僕は知らない。禅にあるかもしれないが、西欧の近代的自我との比較を僕は説明できない。しかし、〝世界の中心は、おのれである〟以上は、〝ひとにとっても世界の中心は、そのひとである〟となるであろうと思う。これが、おそらく人権思想のベースであろう。卑俗な現象ではあるが、日本には、宦官や後宮という制度がなかったことを思い出していただきたい。（制度として後宮のあったのは家光以降の徳川幕府だけだと思う。）このことだけで日本に、人権思想や近代的自我があったといえる自信はない。しかし、戦後の日本について言えば、わが日本は世界中でも、もっとも人権思想の過剰ともいえる現象を多く持っているし、平行して、登山の大衆化もこの数十年のことであろう。

さて、〝世界の中心はおのれである〟ということを、体感するのに登山くらいふさわしいおこないが他にあるだろうか？登山以

外にだってあるだろう。登山くらい近代的自我に目覚めたおこないはないと思うのは、同じ偏見を持ったものたちだけの話である。人生の美は共通の偏見をわかちあうことにある、と僕は思う。登山こそ、最高に〝世界の中心はおのれである〟ことを体感する方法だとおもうことは、そう思う人たちの主観である。その体感は初登攀にこしたことはない。Terra Incognitaもある。つまり昇天経験である。

しかし、名もなき山でもそれは体感できる。登山愛好家とはいつも頂きを極めるたびにそれを経験している。征服という言葉をつかってもよい。ちいさな至福だと謙遜してもよい。登山とはそういう〝楽しみ〟をあたえる文化なのである。

近代的自我の自覚に反対の極の関係にあるものがある。それはおのれは、〝たかが五尺の糞袋にすぎない〟ということである。世界の中心はおのれかもしれないが、それと同時に、〝おのれなくとも地球は回る。〟のである。そこから、〝自然への帰依。〟おのれをむなしうする自然への帰依という心安らぐ心境が生まれる。おおくの宗教が昔から同じようなことを言っている。しかし、既成宗教と一切関係なしに、登山は人間を自然への帰依に導く。そして、これを体感するのも、登山くらいふさわしいおこないは他にないのではなかろうか？そしてまた、そう思うことは、同様に〝共通の偏見〟であることに変わりはないのだが。征服したのではない。ただAscendしただけだ。と言った初登攀者もいる。僕は正確にどう言われたのかしらないが、登山の楽しみは〝帰依〟にこそあると言ったのは今西錦司さんであると記憶する。或いは、〝登山は帰依〟である。と言われたのかもしれない。

僕の考えでは、〝近代的自我〟とその対極にある〝五尺の糞袋〟は表裏一体であるのがよいと思う。デカルトはどういうかしらないが、近代的自我とは、〝世界の中心はおのれ〟であると同時に〝五尺の糞袋にすぎない〟ことを知ることであろうと思う。登山とは、この双方のもたらす、昂揚と安心立命の楽しみを表裏一体として味わえる文化だということになる。まさにこれら双方を一挙に体感することができるのも、登山くらいふさわしいおこないは他にないのではなかろうか？　これがどちらか片方だけなら、超人思想であるか、天命と没我子という人権を無視した思想になってしまうだろう。

最後に、安定した市民社会がなければ、近代アルピニズムは育たないということと、第二地域における、〝近代科学精神と非宗教性〟、〝近代的自我〟について考えてみよう。

安定した市民社会とは、今日の制度文明では、人権主義と中産階級に支えられた民主主義社会によってできるという〝決まり〟である。人権主義と中産階級に支えられた民主主義というものが育っている国が第一地域に多く、第二地域にはすくない。だから安定した市民社会が第二地域にはなかなか育ちにくいのである。近代科学精神と非宗教性も第一地域に多く、第二地域にはすくない。近代的自我の自覚もまた第一地域に多く、第二地域にはすくない。

第二地域は宗教性の密度が高く、近代科学精神に乏しく、近代的自我に目覚めていない人々が多く、人権主義がなく、中産階級が育たず、民主主義が進まず、そういう国々の人々の間に、安定した市民社会は育ちにくいし、近代アルピニズムも育たない。第二地域は歴史上、乱世の連続であり、それがやむことなく長く続いたからである。代々農にいそしむことも、律儀に商いを続けることも許されなかったのが第二地域であろうか。しかし、第二地域に平和の訪れるとき、そしてそれが恒久的なものになるとき、科学も自我も民主主義も第一地域と遜色なくなり、そこから新しい近代アルピニズムが生まれてくることを期待しよう。

登山が、世界の中心はおのれであり、同時におのれなくとも世界は回ることを、征服と自然への帰依を通じて、昂揚と安心立命を味あわせてくれるものだと、桑原さんと今西さんは言おうとしたのではなかろうか。中島ダンナが前号A9で言っているように、〝もはや地上に未踏峰はなくなったと言っても、自分にとっての未知の山は無数にある。〟ＡＡＣＫの登山には、征服と帰依と知的追求と山仲間の同志的生活がある。今西教のすべてはそこにあり、いまや第一地

域だけでなく、第二地域を含めて開花を待っていると言ってよいのではなかろうか。そこまで言えば、これはまさに世界宗教かもと、笑いが吹き出してくるのは、僕だけではあるまい。ＡＡＣＫよ、もって瞑すべしかもである。

僕は、梅棹、桑原、今西のお三人の言ったことを、ただ組替え、蛇足を付け加えたにすぎないかもしれない。このなかの文明文化論は自分のものだが、僕は学問を専門としたわけでないので、体系的にどのように位置付けられるのかも知らない。ただ、ハンチントンの文明の衝突を読み、不遜にも僕ならもっとうまく説明できると思ったことを、書いたまでである。

訃報

編集後記

●本号は、昨年の十一月号と今年の二月号の合併号である。遅れたことを、特に原稿を送って下さった方にはお詫びする。編集長が、少々、『気の病』で、編集がすすまなかった。

南極の氷を踏み（二月）、チロルの山にスキーをし（三月、三週間）、アメリカに友人を訪ねて（四月、三週間）、少々気が晴れた。

『無関心』（と見えること）が一番いけない。ＡＡＣＫの危機を訴えているのに（第二五号、二〇〇二年八月号、〝これでよいのかＡＡＣＫ〟）、意見はひとつも編集長の耳に届かない。

この十一年間に一人しか若手（統計は京大山岳部卒業生に限り行い得た）がＡＡＣＫに入っていない。若手の続かない団体は滅びるに決まっている。これは歴史を見れば明らかだし、考えなくても誰でもわかるだろう。

ＡＡＣＫの幹部（元幹部を含む）は、これをどう見るか。社会の趨勢だから仕方がない、と拱手するしか方法はないのか。会員シニアはどう感じるのか。若手はどう考えるのか。

こんな意見を会員から聴きたいと思い、そして、この危機を避けたいと思ってＡＡＣＫニュースレターを編集してきた。だが意見は少ない。良い考えはないのか。

全員にＡＡＣＫの大戦略を考えろといっているのではない。いろいろな考えがあってよい。スペクトルは広いほうがよい。あらゆるスペクトルを含むのがよい。ＡＡＣＫはＢＢ（ブロードバンド）であるべきだ。

だが、逆に『あるスペクトル』が欠落している、というのは欠陥であると思う。しかも、そのスペクトルが、ＡＡＣＫが『生きるか死ぬかの大戦略』だとしたら尚更である。

いや、そうではあるまい。みな、考えているが、言わないし、書かないだけ、かも知れない。

声を大にして言いたい。考えていることを言って欲しい。若い頃、仲間はみな精力的でエネルギッシュで、私はただただ尊敬と驚異の目で眺める毎日であった。だから、そんな仲間に『考え』がないはずはなかろう。今、若い時代の人はやはり精力的でエネルギッシュだろう。だから書いて欲しい。投稿して欲しい。文の巧拙は問題でない。今、無言でいることはＡＡＣＫの滅亡に連なる。

●本号の本多勝一氏の文（Ａ13）には、次号でお応えするつもりである（北村泰一）。

編集委員　北村泰一、上田　豊、松林公蔵
発行日　二〇〇三年三月末日
発行所　京都大学学士山岳会
〒六一一-〇〇一一　宇治市五ヶ庄
京都大学防災研究所
吹田啓一郎　気付
製　作　京都市北区小山西花池町一一八
（株）土倉事務所